

小・中・都立学校

平成 5 年 度

教育研究員研究報告書

心身障害教育

東京都教育委員会

平成5年度

教育研究員名簿

部会名	地区	学校名	氏名	部会名	地区	学校名	氏名
教育課題	文京	第九中	仲山公美子	合科・統合	杉並	新泉小	早川宏
	江東	深川第四中	北川雅子		北	桜田小	荒川順子
	目黒	五本木小	石川恭子		練馬	大泉東小	染谷昌男
	中野	第二中	岩瀬敏郎		江戸川	清新第一中	鈴木政子
	荒川	第三峡田小	渡部彩知子		都立	立川養護	○秋山孔二
	八王子	第四中	◎伊藤稔		都立	町田養護	武田信一
	武蔵野	桜堤小	○渡辺義子		都立	小金井養護	小松崇
	三鷹	南浦小	木下佳		都立	江東養護	◎鈴木健一
	町田	山崎中	荻本恒也		都立	清瀬養護	高橋一郎
	小平	小平第二小	長嶺一弘		都立	板橋養護	高橋馨
教科	渋谷	富谷小	多田秀夫	養護・訓練	東久留米	神宝小	山折安子
	豊島	西巣鴨中	鈴木真二		都立	久我山盲	阿由葉綾子
	立川	南富士見小	◎柴田やよい		都立	足立ろう	近田竹明
	稲城	稲城第一中	平文昭		都立	大田ろう	大野栄子
	秋川	草花小	霜村和子		都立	光明養護	坂口しおり
	都立	大泉養護	福島厚太郎		都立	府中養護	三浦悦子
	都立	王子養護	高橋清晃		都立	八王子東養護	○佐藤昌彦
	都立	羽村養護	岩間美顕		都立	しいの木養護	飯塚裕子
	都立	府中朝日養護	○荻原稔		都立	七生養護	◎平和美津子
						都立	港養護

世話人◎ 副世話人○

担当

教育庁指導部心身障害教育指導課

若野 昇
砥 柄 敬 三

目 次

〈教育課題〉	2
関心・意欲・態度を育てる指導と評価の在り方	
－人や物への「関心」を広げ、高める授業の工夫－	
〈教 科〉	18
一人一人の児童・生徒の適切な実態把握と目標の立て方	
〈領域・教科を合わせた指導〉	34
一人一人が意欲的に活動するための指導の工夫	
--- 一人一人を生かす集団での指導の在り方 ---	
〈養護・訓練〉	50
指導・生徒の障害の状態に応じた養護・訓練の指導	
－『意思の伝達』の指導を中心として－	

関心・意欲・態度を育てる指導と評価の在り方

—人や物への「関心」を広げ、高める授業の工夫—

I 主題設定の理由

新学習指導要領において、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を目指した新しい学力観、評価観が示された。その中では、特に、「関心・意欲・態度」の観点が重視され、内発的な学習意欲や主体的に思考、判断、表現する力を高める指導及びその評価方法の研究が重要な研究課題となっている。

私たち心身障害教育部会教育課題分科会では、この新しい学力観、評価観について討議を深めた。そして、児童・生徒が卒業後、積極的に社会参加し、社会自立できるようにするためには、学校教育の中で、特に、一人一人の心身の障害の状態や特性に応じた「内発的な学習意欲」を育てることが重要であると共通理解した。

また、その原動力となる、人や物への興味・関心が、どのような発達段階をたどるのかを分析し、「関心・意欲・態度」を育てるための指導の重点や具体的な指導方法、教材・教具の工夫、評価の観点等を、授業研究を通して検証していく必要があると考えた。

II 研究の経過と主な内容

5月	研究主題の検討及び共通理解	10月	研究授業及び研究協議
6月	第1回研究授業指導案の検討及び先行文献の研究		報告書プロットの検討、報告書原稿の作成
7月	研究授業及び研究協議	11月	研究授業及び研究協議、研究のまとめ、報告書原稿の作成
8月	関心・意欲・態度についての概念規定、児童・生徒の実態分析及び関心・意欲・態度の発達段階の仮説立案	12月	研究発表内容及び方法についての検討
9月	各自の研究授業案の検討	1月	研究発表の準備、資料の作成
		2月	研究発表会

Ⅲ 研究の内容

本分科会では、まず、先行文献の研究や指導している児童・生徒の実態分析等から、「関心」・「意欲」・「態度」の関係について、「関心」が土台となり、「意欲」が育ち、「社会自立できる力」を身に付けた「態度」を養うことができるということを共通理解した。

そして、「関心」と「意欲」は、乳・幼児期にみられるような本能的な欲求が、外発的動機付けによって発達し、内発的な意欲に変化することが分かった。そして、「意欲」には「選択力・持続力・努力」の3つの要素があり、人や物への「関心」を高めることが「意欲」としての「選択力・持続力・努力」を育て、更に「態度」としての「自主性・主体性・積極性」を育てるということが分かった。

次に、実際の児童・生徒の「関心」・「意欲」・「態度」の発達段階を知るために、各校より30事例を持ち寄り、それぞれがどの段階であるか整理した。その結果、「関心」の段階に留まっている事例が最も多かった。そして、なかなか関心が広がらなかったり、関心をもって意欲につながらない、といった「関心」を高める指導が難しい実態が多く報告された。そこで、心身障害教育においては「関心」をいかに広げ、そして高めていくかが、指導の重点となると考え、研究を進めていくことにした。

「関心」を高めることが難しいという実態について、更に細かく分析していくと、失敗体験、経験不足、障害の特質、情緒的な不安感などが大きく影響していることが分かった。これらの影響は、大きく「自信のなさ」と「こだわり」となって現れ、「関心・意欲・態度」の育成を阻む要因となると考えた。

以上のことから、「関心」を広げ、そして高める指導を行うときには、児童・生徒の実態に応じて「自信をもたせること」と「こだわりを減らしていくこと」の2点が、特に、重要な視点であると共通理解した。そして、「自信をもたせること」で「関心」を高めていくためには、成功体験をさせることが有効であると考え、次のような指導仮説1を導き出した。

指導仮説1：「成功体験を通し、自信をもつことによって

意欲につながる積極的な関心を高めることができる。」

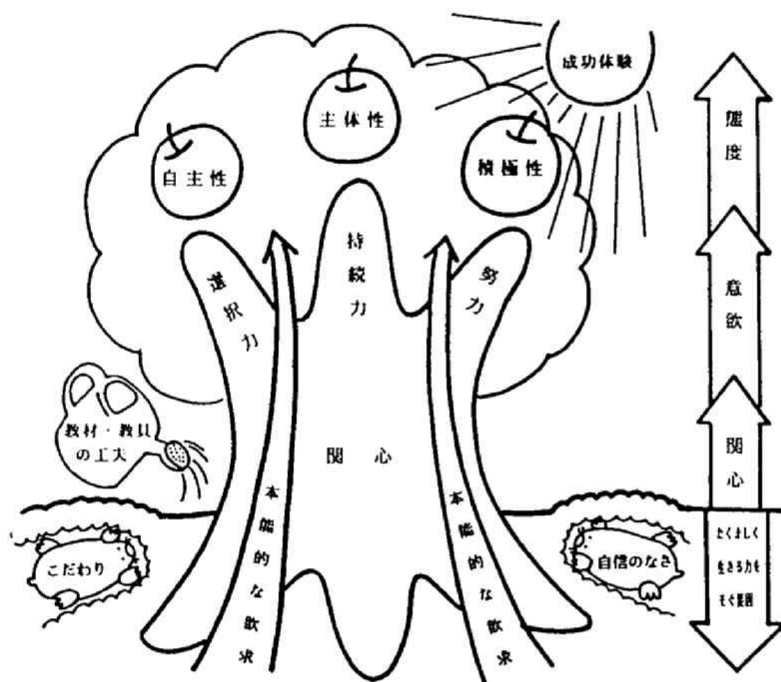
また、「こだわりを減らしていくこと」によって関心を広げていくためには、児童・生徒の興味のあることを取り入れながら、徐々に教材・教具を工夫していくことが有効ではないかと考え、次のような指導仮説2を導き出した。

指導仮説 2 : 『興味のあることを教材・教具に取り入れ、工夫することによって
 こだわりから関心を広げていくことができる。』

そして、この2つの指導仮説を、授業を通して検証していくことにした。

以上のような本分科会の研究内容を図式化すると次のようになる。

関心・意欲・態度の発達と研究仮説との関連図



授業を行う際には、児童・生徒の実態を的確に押さえるとともに、評価の観点を明確にするための「個別指導計画」を作成し、活用した。

関心の高まり、広がりに対する評価については、それぞれの活動場面において児童・生徒の表情、言葉、動作を正確に記録し、評価をしていくことにした。その時の評価の観点として、先行文献の研究から次の4点に着目した。

- ・活動に集中した場面や様子が見られたか。
- ・活動により、自信や成就感をもった様子が見られたか。
- ・活動に主体的に取り組む動作や発言が見られたか。
- ・活動の目標を自分で決めることができたか。

指導仮説1については7事例、指導仮説2については3事例を通して、仮説の検証を行った。以下、代表事例の指導案と、その他の事例の個別指導計画の要点をまとめた。

1 指導仮説1に基づく指導案

A中学校 精神薄弱学級 生徒数 6名 指導者 3名 一斉指導

(1) 対象生徒 3年男子 脳性巨人症・精神発達遅滞

(2) 指導仮説

はじめに成功体験を得ることで、難しく苦手な課題にも取り組む気持ちをもてる

(3) 指導仮説の設定理由

対象生徒は「たくましさをそぐ要因」の「自信のなさ」が強く、自分から発表したり行動したりすることの少ない生徒である。特に、初めてのことや手作業に取り組む時には、とても緊張してしまう。この生徒に対しては、はじめに簡単な課題を設定し、いい作品ができたという実感をもたせることで、次に設定する苦手な課題にも取り組み、選択力・持続力・努力などの意欲を育てることができると考えた。

(4) 授業案

① 単元名 染色「板じめしぼり」

② 単元のねらいと設定理由

これまで本学級では作業学習として、藍の生葉染め・ろうけつ染・しぼり染などを行ってきた。染色は色の変化・鮮やかさ・しぼりを解いた時の模様の意外性などから生徒の心を引きつけ、関心をもたせることのできる教材である。

この「板じめしぼり」は、作業そのものは比較的簡単であり、手作業が苦手な自信のない生徒でも、初めに成功体験を得ることができると考えた。更に、自分で和紙を折ったり、折り方や染め方を工夫するといった、難しい課題も設定することができるので、この単元を取り上げた。

③ 単元の指導計画

指 導 内 容	時間数
和紙のしぼり染めを体験する。 (本時)	1
自分で工夫しながら、できるだけたくさん染める。	1
染めた和紙で作品を作る (コースター・お盆)	2

(5) 関心に焦点を当てた個別指導計画

生徒の実態	指導のねらい	生徒の活動	教師の援助
<ul style="list-style-type: none"> ・手作業や初めてのことを苦手としている。 ・自分から取り組む前に、すぐ教師の援助を求めたり、待っていたりする傾向が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・段階を追って作業をすることで、失敗しないでできそうだという気持ちをもたせる。 ・完成品を見せずに制作させることで、期待感をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用意された材料を使って、説明を聞きながら和紙を染める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・確実に作品ができ、苦手意識をもたないで済むように、手順を区切ってゆっくり説明し、できているかどうか確認しながら進める。
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの前で発言や発表をする時、自分から進んで行うことは少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいな作品ができたという実感をもたせる。 ・作品を認めてもらうことで自信や成功体験を得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの前で、染めた和紙を広げる。 ・作品のでき具合を評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が成功したと実感できるように、「きれいだな」と思えるところを探してほめる。 ・補助指導者にもよいところを言うてもらう。
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で使ったり、プレゼントできる作品ができることを示して、さらに意欲を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・染めた和紙を使って作る作品（コースター・お盆）を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品作りに意欲をもたせるために、カップを用いてお盆とコースターをウェ이터が使う場面を演じて提示する。
<ul style="list-style-type: none"> ・人の意見を気にして、迷ってしまうことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コースターを作る数の目標を、自分で決めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コースターをいくつ作るか自分で決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族や親学級の担任の先生等の名前をあげさせ目標を決めやすくする。
<ul style="list-style-type: none"> ・プリントなどを折る時、四隅が合わず苦手としている。 ・苦手なことも、教師とのかかわりによって取り組める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な作業（自分で紙を折る）に取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和紙を自分で折る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりと説明する。 ・補助指導者と協力し、1回折る度に、できているかどうか確認しながら進める。
<ul style="list-style-type: none"> ・野球が大好きで、選手の名前や背番号をよく覚えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で満足できる作品ができたという自信をもたせる。 ・次の時間に、もっと染めたいか、コースターなどの作品作りをしてみたいか考えさせ、次の時間にも目標と意欲をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作った作品を発表し、感想を話す。 ・次の時間にどんな作業をしてみたいか話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を作り上げたことや作品のよいところ、授業中に頑張っていたところをほめる。 ・教師からも質問することで、本人の興味や次の時間の目標を意識、確認させる。

環境設定	教具・教材	評価の観点	指導の結果と評価
<ul style="list-style-type: none"> ・全員でゆっくりと作品を作る。 ・彩液は二人組で使えるようにしておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ折った和紙 ・6色の絢液 赤・橙・黄 緑・青・黒 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明を集中して見たり聞いたりできたか。 ・説明の後、すぐに自分から作業に取りかかれたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明をよく聞き、自分から作業に取りかかることができた。
<ul style="list-style-type: none"> ・できた作品を前に貼れるようにしておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が作成した作品 	<ul style="list-style-type: none"> 作品発表の時、うれしそうな発言や表情がみられたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を発表する順番を決める時、腰を浮かし、一番先に発表しようとしていた。 ・「作品はどうですか？」の問いに、「いい」と答え、満足した表情であった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・染めた和紙を用いて作ったコースターとお盆 ・コーヒーカップ 		<ul style="list-style-type: none"> ・教師の演技を集中して見ていた。
		<ul style="list-style-type: none"> ・自分で、いくつ作ると目標を立てることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1番に手をあげ、前の黒板に100と書いた。作品作りに自信と意欲がもてたようだ。
	<ul style="list-style-type: none"> ・折っていない和紙 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明を集中して見たり聞いたりでき、紙を自分で折って作られたか。 ・教師の援助を求めたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体指導の中で取りかかれ最後まで自分で折ってみようという様子がみられた。 ・うまく折れなかった時には教師の援助を求めた。
<ul style="list-style-type: none"> ・全員が発表者を見ることができるよう、作業を終わらせ、落ちつかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作品 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の時に、自信や成就感をもった様子が見られたか。 ・次にどんなことをやってみたいと答えたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一番に挙手し、前に出て発表した。 ・2作目について、「ジャイアンツの色」とコメントし、自分の作品を気に入ったような表情であった。 ・次の時間はコースターを作りたいと意思表示をした。

2 指導仮説1に基づく個別指導計画の要点

児童・生徒	小学校 3年	小学校 4年
障害の状態の概要	構音障害（カ行，サ行）	コミュニケーション障害 構音障害（イ列音側音化）
「関心」についての実態	好きな遊びは工夫して楽しむ。初めてすることに対して苦手意識が強い。	自分でできそうだと見通しがつけば，消極的だが取り組むことができる。
指導目標の重点	カ行音の発音練習に主体的に取り組む。	教師や友達と楽しさを共感する。人に意思を伝えられる。
指導仮説	本児の行動を認めることで，自分の行動に自信をもたせ，苦手な課題に取り組ませる。	人に安心感をもったり，楽しさを共感する経験を積むことでコミュニケーション意欲を育てる。
学級名と指導形態	言語障害学級（個別指導）	言語障害学級（個別指導）
授業のねらい	発音練習に自主的に取り組むことができるようにする。	ひらがなの勉強を自主的に取り組むことができるようにする。
単元・題材	構音指導 －養護・訓練「意思の伝達」	コンピュータで遊ぼう －養護・訓練「意思の伝達」
児童・生徒の活動	自由遊びをする。 課題に取り組む（文字，発音，音読）	自分から勉強する教室に移動する。 自分のやりたいコンピュータソフトに取り組む。
教師の援助	最初は，興味ある遊びを続けさせるために，その遊びを一緒に楽しむ。 簡単で抵抗のない課題から，取り組ませる。	本児が安心できるようにいつも隣に座る。遊びやコンピュータソフトを多種用意しておく。楽しくおしゃべりができるように，本児の興味があること的话题をたくさん用意しておく。
環境設定	ファミコンソフトが設置されている指導室を使用する。	じゅうたん敷のプレイルーム ちょっとちらかった学習室
教材・教具	楽しさを共感するためのファミコンソフト。抵抗なく取り組めるようになった書き取り用のひらがな練習用紙。	ゲーム類，おもちゃ類，コンピュータソフト（半分ぐらいはまだ未経験のもの）
評価の観点	自分から，発音練習，音読練習に取り組んだか。	自分から学習室に移動できたか。 未経験のソフトに自分から取り組めたか。
指導の結果と評価	指導の後半，自分から発音練習，音読練習に取り組むことができた。	自分から学習室に移動できた。 未経験のソフトを選べ，教師と一緒に30分位楽しむことができた。
考 察	本児が特に興味のある遊びを，教師と一緒に楽しむことによって，教師に対する安心感が育ち，苦手な発音練習や音読練習にも自分から取り組む姿勢が見られるようになった。	人に対する安心感を育て，楽しさを共有する場面を通すことで，簡単な声掛けや励ましにより，自分から課題や学習に取り組むことができ，自信がもてるようになってきた。

児童・生徒	中学校 1年	中学校 1年
障害の状態の概要	精神発達遅滞，てんかん	精神発達遅滞，場面緘黙
「関心」についての実態	学習全般に興味がない。特定の物にのみ集中，持続することが多い。	自分の意思の表現や二者択一は苦手である。
指導目標の重点	ひらがなの読み書きや，簡単な計算に興味、関心をもつ。	自信をもち，明るい表情で行動することができる。
指導仮説	買い物や調理などの実際の体験を通して学習することで，読み書きに対する自信をもたせる。	人とかかわる楽しい経験を少しずつ増やすことで，自信をもたせ意欲を育てる。
学級名と指導形態	精神薄弱学級（グループ指導）	精神薄弱学級（一斉指導）
授業のねらい	生活の中から教科的学習を意欲的に取り組ませることで，自信をもたせる。	周囲の雰囲気により，明るい表情で歌ったりして，自信をつける。
単元・題材	「煮込みうどんを作ろう」 -生活単元学習	「合唱」 -音楽
児童・生徒の活動	お金の支払い，計算，出納帳への書き写し	身体表現 合唱コンクールに向けての練習
教師の援助	自分で，一品ずつ確認をしながら，ひらがなで記入できるような声掛けをする。本児が分からないときには，すぐ問い返せるように，向かい合って座る。	仲間とかかわる場面を多くする。ビデオ等で本児の表情の変化を引き出す。言葉掛けなどで独唱するきっかけを与える。
環境設定	教室，スーパーマーケット，調理室	武道場（身体表現） 音楽室（合唱），独唱する場面
教材・教具	行間隔が大きく書きやすい出納帳 難しい機能のついていない電卓 B位のやわらかい鉛筆	ビデオ，マイク，カセットテープ 歌詞を忘れてもすぐ見れるように 歌詞カード
評価の観点	ひらがな，数字が正しく読み書きできたか。先生の手を借りなくても学習ができたと自覚できたか。	明るい表情で歌うことができたか。 一人で独唱できたという自信をもてたか。
指導の結果と評価	一文字ずつ確認しながら，ひらがなで書けた。「一人でできた」と発言し，意欲がみられた。	仲間の声を聞いてニコリした。 一人でも大きな声で独唱することができた。
考 察	買い物や調理などの経験を通して，文字や数字を書いたり，計算することができた。援助・励ましを大事にすることで自信をもって，自分から取り組むことができた。	クラスの明るい雰囲気の中で，独唱できたことがきっかけとなって，合唱コンクールを目指して歌を完全に覚え，人前でも歌えるようになった。

児童・生徒	中学校 3年	中学校 3年
障害の状態の概要	精神発達遅滞，てんかん	精神発達遅滞，情緒障害
「関心」についての 実態	発音が不明瞭で，会話が消極的である。 自信があれば，意欲的に表現できる。	下校後，市立図書館などに一緒に行く友達がいる。交通機関に関心がある。
指導目標の重点	大きな声ではっきり話す。 仲間とのやり取りを楽しむ。	人の顔を見てもじもじしたりせず， 大きな声で対話をする。
指導仮説	役割を果たしたり，最後までやりと げる経験から，たくましく取り組 む意欲を育てる。	模擬体験を成功させることで自信 をもたせ，はっきりと対話するこ とへの関心を高める。
学級名と指導形態	精神薄弱学級（一斉指導）	精神薄弱学級（一斉指導）
授業のねらい	応援リーダーとしての役割を果た すことで自信をつける。	人の顔を見て自信をもって話すこ との意義を理解し，対話への関心 を高める。
単元・題材	「連合運動会に向けて」 －生活単元学習	「働くこととは」 －学級活動
児童・生徒の活動	みんなの前で応援練習をする。他 の生徒との会話を楽しむ。	人の顔を見て自信をもって話すこ との効用に気付く。きちんとした 対話を行おうとする。
教師の援助	みんなに応援リーダーの方を注目 するよう促し，本児を励ます。応 援リーダーの声や動きでみんなが 大きな声を出すことに気付かせる。 大きな声や動きができた時には， 大きな身振りで誉める。	模擬体験を成功させる。悪い例の マイナスイメージを印象付け，き ちんとした対話へ関心を向けさせ る。注意する点や，誉めることを 中心にして声掛けをする。
環境設定	体育館 みんなの前に出て応援する場の設 定	教室前方に演技する舞台を設定す る。 教師による悪い例の演技。
教材・教具	一列に並んで，リーダーを注目し ている応援団。	はっきり悪い例と分かる模範演技。 きちんとした対話ができるための 板書や説明。模擬体験を成功させ る小道具。
評価の観点	意欲をもち，大きな声ではっきり 応援できたか。他の生徒とのやり 取りを楽しめたという自覚がもて たか。	悪い例，良い例の違いが分かった か。 意欲的に演技を行い，大きな声で 対話できたか。
指導の結果と評価	大きな声で応援できた。リーダー が大きな声を出すと，他の生徒の 反応が増すことに気付いた。	悪い例，良い例の違いを言え，大 きな声で対話もできた。「自分は きちんとできているか」と日常生 活で教師に尋ねるようになった。
考 察	応援による他の生徒の反応が増す ことで真剣さがあふれ，張り合い をもったようである。	人の顔を見てはっきりと話すこと の意義は理解した。教師の話を集 中して聞いていて，挙手はまだ少 ないが，内容には強い関心を示し ていた。

3 指導仮説2に基づく指導案

B小学校 精神薄弱学級 児童数 11名 指導者 3名 一斉指導

(1) 対象生徒 5年男子 精神発達遅滞・自閉的傾向

(2) 指導仮説

児童の興味・関心を土台にして、課題を設定することで物から人への関心を育てられる

(3) 指導仮説の設定理由

本児は作業を伴う学習は好きで、一人であれば集中して取り組むが、友達と協力したり相手を意識して学習に取り組むことについては不十分である。

集団で学習する場では、対人関係を抜きにしての場面は考えられないので、作業学習での釘を打ったり木を切ったりする場面では指導者が相手を意識させるような声掛けをすることで、友達と協力してやる作業に集中させるとともに、みんなと学習しているという気持ちも高めていきたい。

(4) 授業案

① 単元名「みんなで遊べるおかしの家を作ろう」（校内展に向けて）

② 単元のねらいと設定理由

前単元では、木工作業学習の基礎的内容を学習するという意味で「道具の使い方」「友達と協力して作る」「見通しをもつ」等を中心に、全員に同じ物を作らせた。

本単元では応用として「展覧会に作品を出そう」ということで、児童の興味・関心に即して「みんなで遊べるおかしの家作り」に取り組んだ。児童の主体性や関心を高めるために、「どんな家にしたいか」、「外観をどうするか」、「家の周囲に何を置きたいか」等を考えさせた。

このことにより、「自分たちで考えた家を作る」という気持ちをもたせることで児童の関心や制作意欲を高めさせたい。

主に「友達と一緒に作業をすることで、友達を意識し、協力して学習する気持ちを育てる」ことに重点を置きたい。

③ 指導の展開

「個別指導計画」を参照

(5) 関心に焦点を当てた個別指導計画

児童の実態	指導のねらい	児童の活動	教師の援助
<ul style="list-style-type: none"> ・木を切る、釘を打つ等の動きのある作業には関心がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道具等を見せ、作業に興味・関心をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・使う道具を発表したり、道具を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業内容に興味をもたせるために「家のどこを作るのか」を質問する。
	<ul style="list-style-type: none"> ・実演をして見せ、作業に見通しをもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業工程を理解する。 ・二人組ペアのやり方を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業に関心をもたせるために必要な道具の名前を言わせたり、道具を見せたりする。
<ul style="list-style-type: none"> ・好きな物には、集中して取り組むが、物へのこだわりが強い。 ・特定の大人や友達には関心を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とペアを組み作業を手伝うことで相手の動作を意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達が作業をする時には、板を押さえてあげ、自分がする時には押さえてもらう等、交替しながら作業をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業方法の実演をして、二人組で作ることや交替して作ることを知らせる。 ・相手を意識させるために「〇〇君が釘を打つから板が動かないように押さえて」や「〇〇君が板を切るから押さえて」等の具体的な声掛けをする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に作った物を後片付けさせたり、掃除をさせたりすることで、人を意識させる手立ての一つとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と協力して使った物を運んだり、ほうきや塵取りを使って掃除をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の児童に本児を誘うように仕向けたり「一緒にしよう」と本児から誘わせるように声掛けをする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・誰と何を作ったのかを言わせ、本時の作業内容の理解や人を意識させる手立ての一つとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰と何を作ったか言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本児に作った物の名前や一緒に作った友達の名前を言わせる。

環境設定	教具・教材	評価の観点	指導の結果と評価
・制作中の家の全体像を見せる。	・制作意欲をもたせるための家。	・何を作るのか分かったか。	・友達の発表を聞いてはいたが、何か漠然とした表情であり理解できていないようだった。
・今日使う道具を見せる。	・作業内容に関心をもたせるための道具（金槌、釘等）	・作業内容が理解できたか。	・作業に使う道具の名前が言えた。 ・作成方法の実演は、初めの方はよく見ていたが、後はあまり関心を示さなかった。
・ペアで作業をする場所を指定する。 ・リーダー指導者やサブ指導者が適切に作業の補助をする位置にいる。	・各種道具類 ・板	・友達が板を切ったり、釘打ちをしている時に、板が動かないように押さえていることができたか。 ・自分がする時には相手が補助をしてくれていることが分かったか。 ・相手を意識する言動が見られたか。	・初めは、一人で作業をしてしまい相手を意識した様子は見られなかった。しかし、教師が「○○君が釘を打つから板を押さえて」とか、「○○君が板を切るから押さえて」と声掛けをすると、相手が終わるまで板を押さえていた。さらに、友達の作業の進度に合わせて板を押さえる強さを変えていた。このことにより、声掛けが、相手を意識させるために有効な手段であったと考えられる。
	・ほうき、塵取り	・相手と後片付けができたか。	・声掛けで一時的だが、友達と一緒に片付けをした。
・集合させて、順に前に立って、二人組で発表させる。	・作成した作品	・誰と何を作ったのか、言うことができたか。	・作った物の名前を言うことはできたが、誰と作ったかは、言えなかった。

4 指導仮説2に基づく個別指導計画の要点

児童・生徒	小学校 2年	小学校 4年
障害の状態の概要	自閉的傾向, 精神発達遅滞	染色体異常による精神発達遅滞 構音障害(カ行, サ行)
「関心」についての実態	表出言語が少なく, 視覚で判断し行動する。行動がパターン化する傾向がある。	行動がパターン化しやすい。人のほたらきかけを拒否し, こだわりが強い。
指導目標の重点	こだわりでない関心の範囲を広げる。	パターン化行動にこだわらず, 担当者と楽しさを共感する。
指導仮説	分かりやすい視覚判断ができる教材を, 種々用意することで, 関心を広げる。	楽しさを共感することで人に対する安心感を育て, 豊かなコミュニケーションへの関心を広げる。
学級名と指導形態	情緒障害学級(小集団指導)	言語障害学級(個別指導)
授業のねらい	4つの教材に関心を持ち, 指示された行動や模倣ができるようにする。	感覚遊びで担当者とのやりとりを楽しめるようにする。
単元・題材	「まねっこ, 絵カードとり, パズル, わらべ歌」 - 養護・訓練「意思の伝達」	「箱庭で遊ぼう」 - 養護・訓練「心理的適応」
児童・生徒の活動	動作模倣をする。 指示された絵カードを選択する。 パズルをやりとげる。	感覚遊びの中で, 担当者のはたらきかけを受け入れたり, 自分から新しいものを取り入れ, 変化をつけたりする。
教師の援助	賞賛の動作指示をはっきりとする。 分からないときは, 視覚的に分かるように指示をする。	本児が興味を示した遊びから始める。パターン化した行動はやめさせるのではなく, 他の遊びをするようはたらきかける。焦らせず, 本児のレベルで楽しさを共感する。
環境設定	教員の役割を明確化する。具体的な場所や位置を明示する。	いろいろな要素の入っている遊びを用意したプレイルームや箱庭室。
教材・教具	動作模倣のための, 視覚的に分かるビデオフロピィ。分かりやすい絵カード。できそうなパズル。単純なわらべ歌。	一人遊びになる遊具は片付ける。いろいろな遊具, 特に, 感覚遊びのできる遊具を用意する。
評価の観点	模倣ができたか。先生に間違いを指摘され, 直せたか。楽しい表情はあったか。	教師のはたらきかけを受け入れたか。自分から遊びに変化をつけたか。パターン化した行動が減ったか。
指導の結果と評価	模倣は正しくできた。間違いを指摘され走って正しいカードを持つてくることができた。パズルをやっているときに, 一番楽しそうであった。	自分から箱庭遊びを選び, 担当者のはたらきかけを受け入れ, 遊びに変化をつけることができた。パターン化行動は, 他のことに切りかえられた。
考 察	様々な視覚判断ができる教材を用意したことで, パターン化する本児の行動を広げることができ, 人に対する関心や信頼感が育ってきていると考える。	感覚遊びのレベルで本児に合わせたいろいろな遊具を用意したことで, 本児に合わせたやりとりをすることで, 教師からのはたらきかけを受け入れるようになってきた。

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本分科会では、心身障害学級の児童・生徒の実態を探究していくにしたがい「自信がないために意欲をもてない、また、関心が広がらない児童・生徒が多くみられる」ことに注目した。このような実態をもとに、次のような仮説をたてた。

指導仮説1：『成功体験を通し、自信をもつことによって意欲につながる積極的な関心を高めることができる。』

さらに、授業実践について、「個別指導計画」の指導の結果と評価の欄をもとに考察すると、次の3点が大切であるということがわかった。

- (1) 教師側からの「関心」を育てる適切な指導の工夫を行うこと。
- (2) 児童・生徒に「関心」にかかわる意識をもたせること。
- (3) (1)、(2)は車の両輪のように互いに影響し合い、「関心」を広げる大きな動力となる。

具体的な教師側の指導の工夫

- (1) 児童・生徒の興味を引く学習内容を提示する。
- (2) 授業に目新しさがある。
- (3) 自分で目標を定め、自分で選べる課題を用意する。
- (4) 児童・生徒の発達の特徴を生かせる教材・教具の工夫をする。
- (5) 仲間からの承認を導くことができる場面を設定する。
- (6) 教師が誉めることで承認を感じさせる。

児童・生徒の「関心」にかかわる意識

- (1) 教師がそばにいることで安心感をもつこと。
- (2) 具体的な体験を重ねること。
- (3) 自分で考え、自分で決めること。
- (4) 児童・生徒が仲間からの承認によって自信をもつこと。

次に、児童・生徒の実態から、こだわりにより、なかなか関心が広がらない児童・生徒に対しては、次のような仮説をたてた。

指導仮説 2 : 「興味のあることを教材・教具に取り入れ、工夫することによってこだわりから関心を広げていくことができる。」

これを授業実践を通して検証した結果、次のことが分かった。

(1) 教師側からの「関心」を育てる適切な指導の工夫を行うこと。

具体的な教師側の指導の工夫

- (1) 児童・生徒の興味を的確にとらえた教材・教具を提示し、関心を広げていく学習内容を工夫する。
- (2) 児童・生徒に理解しやすい様々な教材・教具を提示することによって、こだわりを軽減する。
- (3) 児童・生徒に的確に伝わる誉め方の工夫をする。

(2) 児童・生徒に、成就感を味わうことができる様々な体験を重ねさせること。

児童・生徒の意識に関しては、一つの物事にとらわれ、目的が明確にならないこだわりの状態から、教材・教具に取り組むことで物事を意識化し、成就感を味わうことができる状態に変えていくことが大切であると考えた。

以上述べたように、成功体験をさせる課題を用意し、児童・生徒ができたという成就感を味わい、更に誉められることで、自分の行動の内容や目的を理解し、関心を広げていくものと考えられる。

2 今後の課題

授業実践を通し、「個別指導計画」に基づく指導の結果と評価から、児童・生徒の「関心」を広げ、高めるためには、教師側の指導の工夫と児童・生徒の意識に焦点を当てることが重要であるということが分かった。

また、関心の高まりや広がりに関する評価については、

- ・活動に集中した場面や様子が見られたか。

- ・活動により、自信や成就感をもった様子が見られたか。
- ・活動に主体的に取り組む動作や発言が見られたか。
- ・活動の目標を自分で決めることができたか。

以上、4項目の観点により、児童・生徒の「関心」の実態を的確に把握できることが分かった。

しかし、この評価の観点は、児童・生徒の表情、言葉、動作を通しての指導者側からの評価でしかなく、児童・生徒の意識の変容に焦点を当てた評価については、不十分であったとの反省がなされた。

このことから、今後の課題として、児童・生徒自身が「今日は何をしたのか。これから何をしたいのか。どうすればできるようになるのか。」等を考えて、自分を評価していく「自己評価」の観点を含めていく必要があると考えた。

心身障害教育の中で、児童・生徒に自分自身を評価させる「自己評価」の観点を取り入れていくことは、むずかしいことではあるが、今後、「自己評価」の具体的な観点や評価方法を探り、その意義や効果を検証していくことが、「関心・意欲・態度」を育てる指導と評価の研究の大きな課題と考える。

一人一人の児童・生徒の適切な実態把握と目標の設定

1 主題設定の理由

一人一人の児童・生徒のよりよい発達を促すためには、適切な実態把握によって設定された目標のもとに授業を進めていくことが欠かせない。とりわけ心身障害教育においては、対象となる児童・生徒に、発達段階の中の広さなどの多様性が常に存在し、画一的な目標ではそれぞれの課題に合った有効な教科指導を行うことはできない。つまり、一人一人の児童・生徒に応じた、個別の実態把握と目標の設定がなされた上で、全体としては一つのまとまりを持った授業が展開されなければならない。

また、教科指導における児童・生徒の実態把握においては、教科の内容の理解や意欲の背景に、生育歴や性格・特性などの影響が複雑に現れていることを見落とせないし、そこから設定されてくる目標も、一人一人の児童・生徒の生育歴等を含めた総合的な実態を十分に考慮した上での教科の目標でなければならない。そして、授業実践の中で現れてきた児童・生徒の変容を見落とさず、新たな授業計画へフィードバックしていくことが大切である。これらのことを踏まえた上で、よりよい授業を進めていくためには、どのような手順で実態把握をし、目標の設定をしたらよいか、という問題意識のもとに本主題を設定した。

月	内 容	月	内 容
5	・各学校の諸問題を整理した資料に基づき 主題設定に向けての討論	8	・教科個別指導計画の様式を試作 ・研究主題に合った授業案の項目を整理
6	・実態、目標、内容評価などの観点で整理 した資料とビデオにより、各校の具体的な ケースを出し主題設定に向けて討論 ・実態把握と目標設定の難しさを共通認識 し、研究主題を設定（養護高・体育、養護 高・数学を参観）	9	・研究授業（心障小・国語）、協議
		10	・研究授業（心障中・技術）、協議 ・報告書原稿の検討
		11	・研究授業（心障中・国語）、協議 ・報告書原稿の検討
7	・研究主題を踏まえた研究授業（心障小・ 国語）	12	・研究授業（養護高・数学）、協議 ・発表会準備
8	・実態把握と目標設定の観点の整理・検討 ・授業実践の中で、個別の実態把握→目標 設定→指導→評価により授業自体が変わっ ていくサイクル（仮説）を想定	1	・研究授業（心障小・体育）、協議 ・発表会準備と資料作成
		2	・研究発表会

〈研究方法〉

一人一人の児童・生徒の適切な実態把握と目標設定が、授業を行う中で更に深まり、授業が改善されていくためには、授業全体の指導計画と相互にフィードバックし合う；実態→目標→授業→評価の、指導のサイクルがあると仮定した。そして、そのサイクルは、「各教科毎の個別指導計画」を作成して授業をすることにより、有効に機能すると仮定し、本研究を進めた。

なお、「各教科毎の個別指導計画」の様式を作成するに当たっては、東京都立教育研究所相談部心身障害教育研究室の「個別指導計画の様式」（『精神薄弱教育における養護・訓練の指導の充実を図る基礎的研究』平成5年3月）を参考にした。

Ⅲ 研究内容

(1) 指導サイクルの再考

従来、指導を行うにあたっては、実態把握→目標設定→授業実践→評価を行い、以下、目標設定→授業実践→評価のサイクルを、単元毎、あるいは学期、年間毎に繰り返すことにより、児童・生徒の総合的な力を伸ばす努力をしてきた。そのためにはまず、主題設定の理由でも述べたように、「障害、疾病などの状態や生育歴、家庭環境、性格・特性、身体的特徴、基本的生活習慣等にわたっての総合的な実態A」と、「各教科における学習能力、学習意欲・態度、及び教科学習等のベースとなる感覚・知覚・認知・身体機能等の教科的側面からの実態B」の両面から把握する必要がある。（図1-A・B）児童・生徒の実態把握に当たっては、それぞれどのような観点に基づいて行えばよいかは、表1に観点を示してある。

このように、「総合的な実態A」と、「教科的な実態B」の両面を把握することにより、適切な指導目標が設定される。指導目標は、児童・生徒の実態別に細かく設定される。長期目標A・短期目標Aは実態Aに対応して設定され、長期目標B・短期目標Bは実態Bに対応して設定される。それぞれの目標の大まかな期間と設定するにあたっての観点は表1に示してある。

従来の指導においては、児童・生徒の実態A・Bが設定されると、あとは、「長期目標A・短期目標A→授業実践→評価」を一つのサイクルとして指導が繰り返されると見なされていた。しかし、「適切な実態把握」を行うためには、授業実践を行った結果としての評価もまた実態に繰り入れる必要がある。

つまり、指導はサイクル構造ではなく、らせん構造をもっていると見なせば、児童・生徒の実態A・Bが、次時の授業に必ずかかわりを持ち、単元が改まったときには児童・生

徒の実態A・Bも変容していることを示すことができる。(図1)

実態とは、固定したものではなく、指導することによって常に変容し続けるものである。従って、実態をどこまで正確に捉えることができるかが、よい授業を行うかぎになってくるわけで、このらせん構造の核となる。

その、常に変容し続ける実態を正確に捉えるために、新たに、図1の「C」の部分に相当する「前時までの児童・生徒の実態」という概念を導入した。これは言い替えると「授業を行ったことによって変容した児童・生徒の実態」ということになる。この概念を導入することにより、常に実態を見直し、実態を繰り込んだ目標設定が行われる構造になるのである。また、前時までの児童・生徒の実態Cを把握するためには、「児童・生徒」と「教師」の両側面から授業を見直すことが重要である。(表1-C)

(2) 仮説と検証

前述で、指導のサイクル構造は、実は、らせん構造になっており、授業ごとに実態を見直しながら指導していくことで、適切に実態を把握できることができるだろうという仮説を立てたが、その仮説のもとに、教科毎の「個別指導計画」(表2)を作成し、各校で実践した。

教科毎の「個別指導計画」は、表1の観点に基づいて一つの単元で1枚作成し、一人の児童・生徒の変容を1単元の中で捉えることができるように工夫した。児童・生徒の実態、授業の形態、教科等の違いによって記入方法が異なってくることはあっても、年間を通して一人の児童・生徒につき数枚の資料となり活用できるようにした。(後述のIV指導事例参照)

これを、各校で、それぞれの担当授業について作成し、それらを持ち寄って、さらに検討を加えた。

教科毎の「個別指導計画」(表2)を作成していく中で、児童・生徒の実態がよ

図1 実態把握と目標設定のための構造図

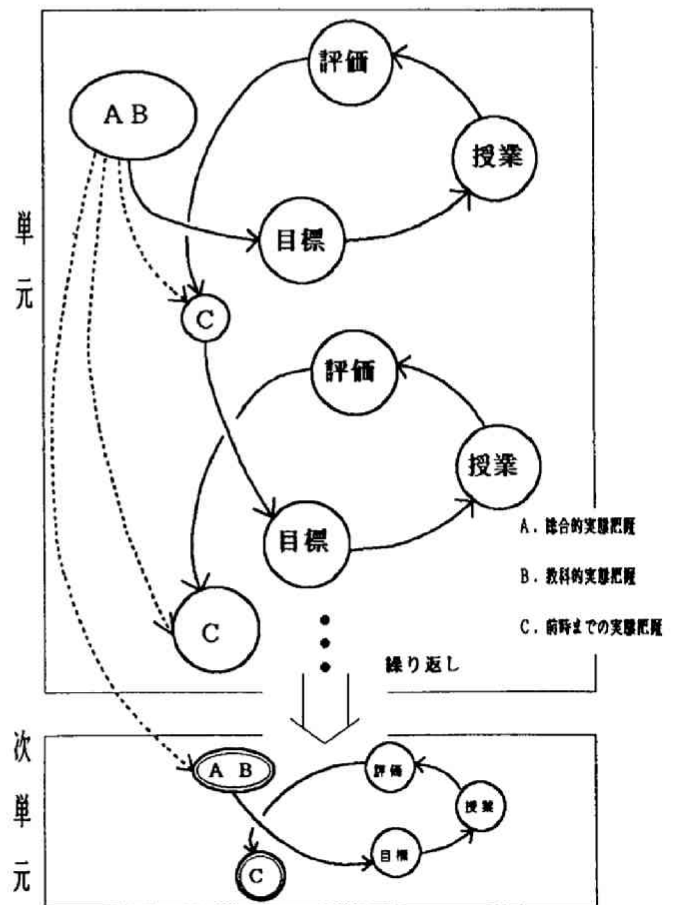


表2 ()科 個別指導計画
 ()立()学校 作成日： 年 月 日
 ()年()組 氏名() 作成者：()

A. 総合的実態把握と目標設定

実態把握		目標の設定	
生育歴など		長期	
		短期	

B. 教科的実態把握と目標の設定

実態把握	目標の設定(1年間)

単元名 []

実態把握	目標の設定(単元の時間)

C. 前時までの実態把握

月日	児童・生徒	指導者
実態の変容		

IV 指導事例

[指導事例 1]

《国語科》 小学校精神薄弱学級

1 単元名 「ことばあそびをしよう」

2 本学級の実態

4年生（男子1名）、3年生（男子1名・女子1名）、2年生（女子1名）の4名で構成されており、自閉症（傾向を含む）3名、ダウン症1名で、軽度から重度までの精神遅滞の児童である。集団としてのまとまりは、まだ十分でないが、4人でお互いに意識し合い、心配したり手助けし合ったりという行動がとれてきた。そこで、1学期の国語・算数の授業内容は、児童の障害の程度にかなりの差があるので個別に学習する時間を多く設定したが、4人のかかわり合いの場面を工夫しながら、各自の目標に迫る学習を行いたいとの願いから本単元を設定した。学習中の指導内容、発問を大体理解し、自分で考えた答えが返ってくるのが2名である。また、話し言葉だけでは表現しにくい児童が1名いる。言葉での指示は理解しにくく、自分の感情で行動したり自分にかかわりのある範囲については発語する児童が1名である。4名のうち3名は、学習態度はむらはあるが、まじめで前向きである。

3 研究主題に沿った実態把握と目標の設定

対象児D（小4）の教科毎の個別指導計画

A.総合的実態把握と目標の設定

	実 態 把 握	目 標 の 設 定
生 育 歴 な ど	<ul style="list-style-type: none"> ・家族は父母と妹。過保護気味に育てられ、日常生活や遊びにおいても未経験のものが多く。 ・3歳で保育園入園、言葉の遅れ等を指摘され、4歳～6歳、児童相談所の指導を受け児童学園に通園する。 性格はおとなしく、自信がもてないと涙ぐむ。対応する人により態度が変わる。固執傾向がある。 ・身体機能等については、身体が固く動きが全体的にぎこちない。視線が合いにくい。また、触覚、味覚、臭覚等が過敏で自閉的な傾向をみせている。 	長 期 <ul style="list-style-type: none"> ○基本的な生活習慣（生活リズム・清潔感）を、身に付ける。 ○次は何をしたらよいか、指示を待たず自分で行動できる。 ○先生や友達に対して、聞きたいことや言いたいことを言葉で言えるようになる。
		短 期 <ul style="list-style-type: none"> ○給食や学習の準備を予測して自分でする。 ○「わかりません」「〇〇を貸してください」等、言葉で言う。

B. 教科的実態把握と目標の設定

	実 態 把 握	目標の設定（1年間）
見る 聞く	集中し続けることが苦手である。注意を促すと視線が他の方を向いて、体が不自然な姿勢になってしまう。学級内での指示の聞きとりは可能である。	○話し手に注目して聞き、内容を理解することができるようにする。
読む	平仮名の清音が読める。濁音、半濁音は少し読める。一音ずつのひろい読みが多く、一語としてのまとめ読みは限られた語句のみ読める。	○清音以外の読みを確かなものにする。 ○簡単な絵本・メモを読むことができ、内容を理解することができるようにする。
書く	平仮名36文字書ける。単語は一文字ずつ確かめながら書く。文字が抜けることも多い。	○語いを増やし、簡単な日記・作文が書けるようにする。
話す	質問に対し経験した範囲の中からなら答えられる。助詞が抜ける。反復もある。	○学習の手順が分からない時は質問できるようにする。 ○友達がしていることをみて話しかける。

単元名 [ことばあそびをしよう]

	実 態 把 握	目標の設定（単元の時間）
見る 聞く	ゲームのやり方を聞き取ることができる。聞いている途中で確認を何度もしたり、友達の発言を遮ったりすることもある。	○最後まで説明等を聞き、分からないことは、その後で質問できるようにする。
読む	単語は一音節ずつ押さえて読み、なじみの薄い語句は意味が理解できない。濁音を含む単語が一まとめに読めない。	○一音ずつのひろい読みから絵カードを手掛かりに一語としてのまとめ読みができるようにする。 ○濁音を含む単語が読めるようにする。
書く	書けない文字10字については、手を添えて書く練習をしている。書ける文字の単語は、模写が可能である。	○単語カードの文字を正しく書くことができるようにする。
話す	友達ができないと、そばにいて自分でやってしまうことが多い。	○相手に動作や言葉で教えたりできるようにする。

4 指導の実際

(1) 目標

- ① 物の名前を理解し、正しく発音できるようにする。②絵カードを使いながら、単語を増やすとともに、一語として読めるようにする。③濁音、半濁音が混じった単語も一語として一まとめに読んだり、正しく書いたりできるようにする。④お互いに注目し合い、かわりをもって、授業に参加することができるようにする。

(2) 学習指導計画（16時間）

第一次「カルタとりゲーム」により、ことばあそびの学習内容が分かり、学習意欲をもつ。

- ① 友達や担任が読んだ音を聞いて、正しい文字カードを探す。
② 頭文字を手掛かりに言葉集めをする。

第二次「おみくじゲーム」により、単語を読んだり書いたりしようとする意欲をもつ。

- ① おみくじゲームをしながら、絵→文字→単語が分かる。
② 単語の読み書きを絵カードをたよりにしながらできる。

第三次「人名」「動き」の2つのサイコロを使って、文づくりへの意欲をもつ。

- ① 2つのサイコロを組み合わせ、「～は～する」の文を作り読んだり書いたりする。

(3) 前時までの実態（抜粋）

	児 童	指 導 者
9 / 9	「ま」のつく言葉集め。まり、まっち、が自分から言える。他の子が発表しているとき、集中せず、注意される。視写は自力。読みは、2～3回練習すれば読める。	濁音を含む単語もあまり抵抗なく読めるようになってきている。
9 / 14	「だいこん」「つくえ」「ぶた」「ちょうちょ」「ひこうき」「たまご」「たばこ」のカードを出して、2～3回の練習で読める。まとめの読みは絵カード無しでも読めた。拗音の学習はまだなので、文字チップは自分では取れない。長音の「う」の文字がわからず。「ひこうき」は「ひこおき」と取る。書く指導はこれからである。	拗音と長音の指導はまだであったが「ち」と小さい「よ」で「ちょ」と読み、書くことを指導。読みは、わりとすらすら読めるが、文字を一つ一つ正確に読んでいない時もある。
9 / 16	きゅうり、じどうしゃの「う」の字は、ぬける。文字チップはききゅうり、じどうしゃと並べる。「やぎ」をとったが「いぬ」という。メエメエと鳴きまねをする。たかちゃんのいえにいとヒントを出したら「やぎ」の言葉が出る。ひとまとまりに読むことができる。	「じどうしゃ」「かぶとむし」「はさみ」「きゅうり」「はし」「やぎ」「のこぎり」のカードをだす。文字チップは、拗音の学習でも有効である。

(4) 本時の目標

- ◎学級全体としての目標 ①絵カードの物の名前を理解し、単語カードと結びつけること

ができる。②友達の活動に注意を向け、一緒にゲームを楽しむ事ができる。

- ◎対象児童の個別目標 ①絵カードの物の名前を理解し、単語カードと結び付けることができる。②単語カードを一語のまとまりとして読むことができる。③友達の活動に注意を向け、一緒にゲームを楽しむ事ができる。

(5) 本時の展開 (10/16)

	指導内容		学習活動		教材・教具
	指導の流れ	教師の動き	全体の学習活動	対象児D君の学習活動	
指導	①ゲームのやり方を思いださせ、みんなでやろうとする意欲を持たせる。	「何ていうゲームだったかな」ゲームのやり方を言わせながら教師が動いて見せる。	①ゲームのやり方を思いだす。 ※B子・D男が発表可能。	集中して聞けるよう話す。人を注目する。ゲームのやり方を思い出す。 「ぴったりゲーム」 「おみくじひくの」 「カードとるの」 「カードとってはるの」	
展開	②ゲームを始める。 1～5人までを一人ずつ順番に前へ出てきてやらせる。	A 物の名前の復唱・パズル。 B ノートに絵カードの単語を書く。 C 単語カード小の5枚の中から選ぶ。	ゲーム開始 ①おみくじ、色別カードをひく。 ②同じ色の絵カードをひく。 ③絵カードの物の名前を言う。 ④絵カードを黒板にはり、合う単語カードを選ぶ。 ⑤正しく読み、正しいカード合わせをする。	確実に取ることができる。 友達の発表をよく聞き正しいかどうか判断する。 平仮名清音、拗音の一部を読み、カードがとれる。 友達がやっている時は自席で文字チップを並べる。 単語をひとまとまりの語として読めるようにする。	おみくじ色別カード 絵カード 単語小カード 文字チップ
まとめ	③単語カードを見ながら書く。読みの習熟を図る。 ④次時の予告をする。	B 特殊音の読み書きに注意させる。 C 口形に注目させ正しい発音を練習する。 A 復唱させる。	①単語カードの視写・読み。 ②次回はどんなカードが出るか。	単語カードをノートに視写する。 絵カード無しでも読めるよう繰り返し読む。 次時への意欲を高める。	

(6) 評価

児童の面から

- 絵カードの物の名前を理解し、単語カードと結び付けることができたか。
- 単語カードを一語のまとまりとして読むことができたか。
- 各個別に設定された目標がどこまで達成できたか。

指導者の面から

- 単元構成の面から、本授業の位置付けは適切であったか。
- 目標は授業全体として適切であったか。D児としてはどうか。
- 教材の面から、おみくじカードは、児童の興味・関心を引きだし学習意欲を持たせられたか。
- 絵カードや単語カードは学習を進めていく上で適切であったか。
- 授業の形態として、全体で進めていきながら個別で対応していくやり方は適切であったか。

5 指導の結果と考察

様々な発達段階にある児童に、単元を組み授業を行う時、一つの授業をとって考えてみると、活動が共有される場面はあっても、各自に用意される学習課題は一人一人異なってくる。それは、実態に合った目標をそれぞれ立てているからで、指導者がその目標を的確につかんでいればいるほどきめ細かい対応をすることができる。本時においては、A児は黒板に出されたカードと同じカードを探したり、同じカードの2分割を完成させたりする学習、B児は絵カードの名前を直接ノートに書く学習、C児は同じ絵カードの名前を数枚の文字カードの中から読んで選び出す学習、D児はその名前を文字チップを使って並べノートに書き写す学習というように、共有するゲームの場面ではお互いに見合い楽しみ合いながらも、それぞれの課題は異なっている。一人一人が、自分の目標に向かって十分活動しながら、かつお互いがかかわり合いながら一つの授業を進めていくのである。各自の目標の達成に向け適切な指導を行うために、学級のそれぞれの児童について実態把握から目標設定までをしっかりと明記し、個別指導計画としてまとめておくことは非常に有効な手段であった。(まとめ②)

対象児Dについて考えてみると、平仮名の濁音の読み書き、それらを含んだ語の一語としてのまとめ読みを目標にしたわけであるが、毎時間ごとの記録をしていくと、D児が刻々と変容していく様子がはっきりとあらわれた。濁音を含む単語の読み書きは、予想を越えてどんどんできるようになり、絵カードの内容は濁音を含むものから半濁音を含むもの、そして長音、拗音を含むものへと広がっていった。

また、最初の段階ではサイコロを使ったゲームの課題で指導したが、学習させたい単語を精選して1時間の授業の中で与えたほうが、D児ならびに他の児童にとっても理解しやすいのではないかと考え、おみくじ方式のゲームの課題に変更した。この変更は、児童の変容に応じた指導法の反省、検討を繰り返し記録していく中から生まれたものである。(まとめ④) 実態を踏まえた授業の工夫という点からみると、D児は文字チップを使っての単語づくりがかなり速くでき、チップをならべていくことによって清音以外の文字の成り立ちに気付くようになった。逆に、C児は、文字チップを使って学習させていこうという計画であったが、文字チップを捜し出すことに抵抗があり、単語カード(小)を使っての学習に切り替えることにより学習が進んだ。この例のように、毎時間の授業を目標にてらして見直すことによって、次の授業への有効な手立てを発見することができる。

今後、さらに単元の指導を積み重ねていくに従い児童の変容を書き加えることにより、一人一人の児童へのきめ細かい成長の手助けを行っていく必要がある。

[指導事例 2]

《技術科》 中学校精神薄弱学級

1 単元名 「カレンダーを作ろう（2回目）」

2 学級の実態

本学級の生徒は9名である。作業室の広さの関係から一斉の授業が不可能である。そのため、生徒全体を同じような構成で縦割りに2グループに分けて、技術と美術を隔週で実施している。

生徒の障害は、ダウン症（3人）、自閉症（1人）、てんかん（1人）、情緒障害（1人）、その他（3人）である。意思の疎通がまったくできない生徒はいない。ただ、生徒の能力の差が大きく、同じ教材を学習する場合でも、指導法を工夫し、作業の選択を個々の生徒に合わせて行う必要がある。

3 研究主題との関連

対象生徒A（中2 男子）の教科毎の個別指導計画

A. 総合的実態把握と目標の設定

	実 態 把 握	目 標 の 設 定
生 育 歴 な ど	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症 ・兄が家族との折り合いが悪く、家庭生活が不安定であるが、現在は落ち着いてきている。 ・性格はおとなしく、指示に従った行動ならできる。 ・強く注意されたり嫌なことがあると、学校ではなく家庭で荒れることがある。服を破ることが多い。 ・利き手は、左である。 ・自ら発声できる言葉はあるが、少ない。 《おはよう・こくご・きがえ・いと(糸)・すみ(墨)・つくえ・さよなら》 ・聞き取る力があり、指示に的確に行動できる。 ・ひらがなを理解していず、読むことができない。 ・体力があり、マラソンなど持久力がある。 ・衣服の着脱は自立している。 	<p>長 期</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自らの要求を言葉あるいは体の動きで表現する。 ○安定した学校生活及び家庭生活を送れるようにする。
		<p>短 期</p> <ul style="list-style-type: none"> ○発声できる言葉の種類を増やす。 ○指示を待たないで、自ら行動できるようにする。

B.教科的実態把握と目標の設定

実 態 把 握	目標の設定（1年年間）
①自分に分担された仕事は最後までやること ができる。 ②ものを作ることに少しは関心があり、仕事 への意欲をもつことができる。 ③危険な場所や状況を把握できていない。 ④機械や道具類を使うことができるが、言葉 による指示や援助が必要である。 ⑤手元を見て作業できるが、集中力が持続で きないことが多い。	○機械や道具の名前を覚え、安全に注意して 使えるようにする。 ○集中力を持続して、ていねいに作業できる ようにする。

単元名 [カレンダーを作ろう（2回目）]

実 態 把 握	目標の設定（単元の時間）
①電動糸ノコで直線を切り取ることができる が、言葉による援助が必要である。 ②ボール盤を使って穴を開けることができる。 ③手動ドリルで穴を開けることができる。 ④ヤスリをかけることができるが、仕上がり 具合の判断は難しい。 ⑤塗料を塗るとき、刷毛をうまく使えず、は み出したりムラになったりする。 ⑥釘を一人で打つことができる。	○道具の準備・片付けができるようにする。 ○電動糸ノコで安全に注意して、正確に直線 を切れるようにする。 ○自分の分担の作業を意欲をもってできるよ うにする。

4 指導の実際

- (1) 目標
- ① 前単元に続いて同じ作品を製作することによって、より完成度の高い作品に仕上げる。そのために、生徒の能力のできる作業工程を分業にする。
 - ② 日付を扱うことによって、数の認識力を高める。
 - ③ 他校の学級にプレゼントすることにより、新たな人間関係を意識させる。

(2) 学習指導計画

- | | | |
|------------------|-----------|---------|
| ①ベニヤ板の切断
(本時) | ②ピンの位置の設計 | ③穴開け |
| ④ピン作り | ⑤ピンの打ち込み | ⑥ヤスリかけ |
| ⑦数字の複写 | ⑧色塗り | ⑨ワックスかけ |

(3) 前時までの実態

生徒	指導者
<ul style="list-style-type: none"> ○定規を当てる時片方を当てることはできるがもう一方は当てることできない。 ○電動糸ノコの操作で、切り落とした木片を払うとき手元を見ないで、危うく指を切りそうになる。 ○ヤスリかけで一か所だけ集中して磨いてしまう。 ○日付の数字を描くとき輪郭線の中を正確に塗れずはみ出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○左利きの生徒のための線引きの適切な指導が足りなかった。 ○機械の電源の操作についても、声を掛けて、切りを中断したら電源を切るという判断力を付けるべきだった。 ○電動糸ノコで刃が線から外れたときの援助の方法があいまいであった。 ○分業の作業の内容があいまいであった。 ○磨くりズムを作り、回数を決めたらどうであろうか。 ○シルクスクリーンの技法で製作する。

(4) 本時の目標

[全体] ○自分で線を引き、4.5 cm平方にベニヤ板を切断する。

○電動糸ノコで正確に線上を切り取る。

[A男] ○2カ所印をつけた板に定規を当てて真っすぐ線を引く。

○電動糸ノコ準備・操作・片付けを言葉の指示により、正確にできるようにする。

(5) 展開

	指導内容		学習活動		教材・教具
	授業の流れ	指導者の動き	全体	対象生徒A	
導入	①あいさつ ②説明	本時の予定及びねらいをいう。 教材を配る。	静かに話を聞く。	指導者の顔を見るようにする。	定規 ベニヤ板 ピン 電動糸ノコ 延長コード 電動糸ノコ
展開	③設計	生徒の作業状況に応じて、個々の生徒にあった方法を指導する。	①板に定規を使い4.5 cmごとに印をつけていく。 ②印のところに定規を当てて正確に線を引く。	①あらかじめ印をつけてある板に定規を当てる。 ②強く定規を押さえ、ずれないように線を引く。	
	④準備	設計の終わった生徒から機械の準備をさせる。	自分で機械を設置し、電源をつなぎ次の作業の準備をする。		
	⑤切断	生徒の前に立ち板の押さえ方を指導する。 声かけをして失敗しないように注意させる。	電源を入れ、板を線から外れないように切断する。	よく手元を見て作業する。	

ま と め	⑥片付け・清掃	切り取った板は全部まとめておく。	自分が使った機械を元の場所に片づける。	ほうき 雑巾	
	⑦評価	本時の作業状況を質問する。 次時の予告をする。	ほうきで木屑を取ってから、雑巾がけをする。 自分の作業がどこまでできたか報告する。		手を挙げる形で質問に答えるようにする。
	⑧あいさつ				

(6) 評価

- [生徒]
- 個別目標を達成することができたか。
 - 意欲的に作業を行うことができたか。
 - 自分の手元を見て作業することができたか。
- [指導者]
- 生徒の目標の設定が適切であったか。
 - 生徒を意欲的に作業させるためにどんな手だてを講じたか。
 - 安全に対する配慮がしっかりなされていたか。
 - 分業という作業方法が生徒に理解できていたか。
 - 指導方法・援助方法は適切であったか。
 - 複数の指導者間の意思の疎通はなされていたか。

5 指導の結果と考察

今回の指導事例は授業研究で指摘された点を検討して実践したものである。今回の単元が、1学期に行った単元と同じ作品の製作ということで、[教科的実態把握]と[前時までの実態の変容]に記述する内容が明確になり、A児についていえば、定規の当て方・電動糸ノコの操作で手元を見ないという点で新たな目標を設定することができた。また、前単元は個人の作品ということで全工程をできるだけ自分の力で行うような授業内容にしたが、今回は分業という新しい授業の形態で実践できた。(まとめ④⑦⑧)ただ、障害の重いA児にとって直線を引くという目標は、分業という指導形態の中では適切ではなく、電動糸ノコの操作に目標を絞ってもよかったと思う。(今後の課題①)

個別指導計画の作成に当たっては、技術科としての実態把握の項目はどれを重点的に押さえたらよいか、その選択に迷ったが(今後の課題②)、この個別指導計画が貴重な授業の記録となり、指導のポイントが明確になったのは確かである。本校は教科数も多く生徒も9名な

ので、生徒一人一人の全教科の個別指導計画作成は分量が多くなると継続しにくい。個別指導計画は学校の実態に合わせて、作成しやすいように改善する必要がある。(今後の課題④)

V まとめと今後の課題

本研究は、児童生徒の実態を的確に把握し、適切な目標を設定するために、児童・生徒の全体像から各単元の授業の目標までを、一日で把握することができる教科毎の「個別指導計画(実態把握と目標設定)」作成が中心になった。教科毎の「個別指導計画(実態把握と目標設定)」の作成によって児童・生徒の実態の変容をよりの確に捉えることができれば、授業を改善・充実していくことができると考えた。

1 まとめ

- ① 教科の指導においても、それぞれの児童・生徒の生育歴、性格・特性、身体機能、基本的な生活習慣などを含めた、総合的な実態把握をすることが大切である。教科毎の「個別指導計画」を作成することを通じて、実態の把握を的確に行うことができ、より適切な目標のもとに授業を進められるようになった。
- ② 心身障害児の指導は、集団指導の場面にあっても、一人一人の実態と目標をはっきりさせる必要がある。その目標達成のためには、それぞれの個別の課題にあった教材による指導がふさわしく、すぐに見られる資料として個別指導計画が有効であることが分かった。
- ③ 実態を総合的な実態A・教科的な実態B・前単元までの実態Cの3つの観点別で整理することで、児童・生徒の課題がより明確になった。
- ④ 個別指導計画の中に単元の計画(実態、目標、変容)を盛り込んだことにより、次時の授業の工夫がしやすくなった。
- ⑤ 教科指導を進めるにあたり実態把握と目標設定の過程をらせん構造図として明らかにしたことにより、より有効な実態把握をすることができるようになった。
- ⑥ 日々の授業で行っていることを、客観的に個別指導計画として表すことができたことは、来年度以降の各校の実践を行うに当たっての有効な指針になる。
- ⑦ 単元毎の実態把握の仕方については、いくつかの場合があることが分かった。
例・教科の実態を詳しく分析することによって、単元を設定する際の実態をつかむことができる。
 - ・新しい単元の場合は、事前に準備の授業を行うことにより実態をつかむことができる。
 - ・同じような単元を設定する場合は、前の単元の実態をそのまま単元の実態把握に生か

すことができる。

- ・担任の単元設定の願いを分析することにより、単元の目標を具体的に設定し、その目標についての児童・生徒の実態をさらに詳しく把握することができる。

⑧ これまでの授業方法を見直すよい機会になった。

2 今後の課題

- ① 教科毎の個別指導計画の作成を通して、児童・生徒の実態の把握の方法はかなりはっきりしてきたので、その結果を踏まえて、具体的な授業の工夫がどのように児童・生徒の変容につながっていくのかを整理する必要がある。
- ② 教科毎の実態把握や目標設定の観点を、全教科にわたって検討する必要がある。
- ③ 単元毎の実態把握の仕方について、さまざまな場合毎に実践を整理していく必要がある。
- ④ 個別指導計画の様式については、資料として有効活用・保存するために、実践把握・目標設定と、前時までの実態をそれぞれ1枚として2枚に分けるようにしたり、ワープロだと資料の積み重ねがしやすいが、手書きでも有効に活用できる手だてを考えたり、さらに検討する必要がある。

一人一人が意欲的に活動するための指導の工夫

——一人一人を生かす集団での指導の在り方——

I 主題設定の理由

一人一人の子どもが、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができるようにするためには、その資質や能力を育てる必要がある。そのためには、まず、一人一人の子どもたちが意欲的に学習に取り組み、生き生きとした学校生活が過ごせるようにしていくことが大切である。できないところをできるようにするというような、課題達成面のみを目標とするのではなく、一人一人の子どもの「良さ」を積極的に見だし、子どもが持っている様々な可能性を引き出し、伸ばすことが大切であると考えた。このような観点に立って、授業の一つ一つの指導場面での一人一人の子どもの課題を明らかにし、指導の手立てを考えて行かなければならない。

このようなことから、前年度の成果の上に立って、一人一人の子どもが意欲を持って生き生きと活動するにはどのような工夫が必要かを研究の主題とすることにした。

一人一人の意欲を育てる指導は、集団での指導場面でも大切である。集団での個の指導に視点を置いた先行研究が少なく、また、集団での指導場面では一人一人への具体的な対応が埋もれがちになるので、「一人一人を生かす集団での指導の在り方」という主題を設定した。

II 研究の経過と方法

1. 研究の経過と主な内容

月	内 容	月	内 容
5	研究主題の仮決定と研究方法の検討	10	指導案の検討及び授業研究
6	各校の実践例の検討、主題の本決定	11	研究のまとめ、研究報告書原稿の検討
7	主題に関する共通理解を図る	12	研究発表の内容・方法の検討
8	ビデオ分析を踏まえモデル指導案の作成	1	発表会準備と資料作成
9	指導案の検討及び授業研究	2	研究発表会

2. 研究の方法

(1) 研究主題の検討

各自の希望する研究主題を持ち寄り、共通項目を主題として取り上げる方向で討議を重ねた。その過程で、先行研究の検討、ビデオによる実践例の検討を行い、主題を決定した。

(2) 授業分析とモデル指導案の作成

ビデオの実践例に基づき、集団の形態、教材・教具、人間関係等が、意欲とどう関連し

ているのかを検討した。また、KJ法を利用し、「集団の中で個を生かす」ための指導上の配慮事項について整理し、項目をもとにモデル指導案の様式を作成した。

(3) 授業研究

授業研究を行い、指導案の検討および、具体的な指導について討議を深めた。

Ⅲ 研究内容

1. 「集団の中で、一人一人を生かす」指導方法の検討

各校から指導事例を持ち寄り、指導方法を検討することにした。様々な指導事例が出されたので、集団での指導の方法を共通理解するために、領域・教科を合わせた指導の形態である日常生活の指導と生活単元学習の事例をとりあげることとした。

事例を検討した結果、成就感や成功感が味わえるようにする、意欲的な活動になるようにする、集団の活性化を図る等の指導方法に関する観点が多く出され、それぞれに共通して、「一人一人の能力・特性に応じた指導」が前提になっていることが分かった。一人一人が集団の中で生き生きと活動しているということは、取りも直さず、一人一人が意欲的に学習に取り組んでいるということである。

また、一人一人の子どもが、友達や教師との関係を意識しながら集団を構成している。すなわち集団に所属しているという意識をもちながら、意欲的な活動を積み重ねることが集団の活性化にもつながる。従って、その意欲的な活動をどう引き出していくか、集団の中で一人一人に焦点を当てた指導をどう工夫していくかということが、何よりも先に考えていかなければならない問題であるということを共通理解した。

2. 指導の工夫を考える視点

集団の中で一人一人を生かすということは、一人一人の子どもに合わせた具体的な指導を行うということである。そのような指導を計画的に着実に行うためには、一人一人の障害の状態、興味、関心、意欲を的確に把握する必要がある。子どもが持っている学習能力－表現力、思考力、判断力等－を伸ばすためには、子どもの個性を積極的に見だし、学習意欲を引き出すことが大切である。このような共通理解のもとに、主題および研究対象とする集団の形態・事例が決定された。

3. 事例の分析と観点の整理

各学校の授業の様子を収めたビデオを見ることによって、区立校と都立校の違い、学部・学年での違い等の認識を深めながら、共通する課題を探った。次に、集団の中での個別の指導が配慮された授業のビデオを4校から持ち寄り、指導案と対比して授業分析を行い、一人一人を生かす、生活単元学習の計画の望ましい在り方を検討した。

その際、細かな検討課題を集約する過程で、「集団あつての個人か、個人あつての集団か」という議論が持ち上がってきたため、再度主題に沿った形で共通理解を図った。すなわち一人一人を生かす集団での指導の在り方というのは、集団での個別指導の在り方、及び個別的配慮の仕方ということである。換言すれば、「集団指導の中で、個別の指導計画に基づいた授業づくりを目指す」ということである。

そこで、具体的にビデオを見る観点を整理するために、各校の日頃の実践を踏まえて一人一人を生かす集団での指導の在り方での重要な点と、問題点をカード化し、KJ法で整理してみた（カード数 107枚）。

その結果、次のような小項目に整理することができた。

- ① 子どもの体調や精神状態、行動等の把握をしっかりと行う。
- ② 子どもの能力・特性に合わせた課題設定が必要である。
- ③ 教師集団の役割分担を明確にする。
- ④ 教師と子どもの共感関係を深める。
- ⑤ 子どもの能力・特性に合った指導方法を工夫し、子どもに見通しを持たせる。
- ⑥ 子どもの自主的活動を重視する。
- ⑦ 子ども同士のかかわり合いを重視する。
- ⑧ 目的、課題に応じた集団を設定する。

これらを、

- | | |
|--------------------|---------------------|
| A. 課題設定 | B. 指導方法の工夫 |
| C. 教師の役割分担、子どもとの関係 | D. 子ども同士のかかわり合いと自主性 |

という4つの大項目にまとめた。このA～Dをビデオによる授業分析の観点とし、それぞれの観点でビデオを見るための班を編成した。各班に分かれ、同じビデオを4回見て気がついたことをカードに記入し、KJ法を使って整理した。

4. 「一人一人を生かす集団での指導の在り方」の模式図の作成

KJ法によって整理・確認された授業分析の結果を基に、一人一人を生かす集団での指導の在り方を構造化することとした。この結果を模式図に示したものが図2である。この図に対応させて、具体的な実践の場で指導計画を作成する際に必要な項目を整理した。その結果モデルとなるべき指導案を模式図に示したものが図3である。また、この指導案の様式例が図1である。

〈指導案の様式例〉

1. 単元名
2. 単元設定の理由
例えば学部目標（学年・学級）など
3. 単元のねらい
4. 単元の学習計画（内容）

第1時：……

本時：……

第〇〇時：……

5. 個々の実態と単元での個々の課題
6. 本時のねらい
7. 本時での個々の課題と指導の手だて
8. 本時の展開*図1参照
9. 評価の観点

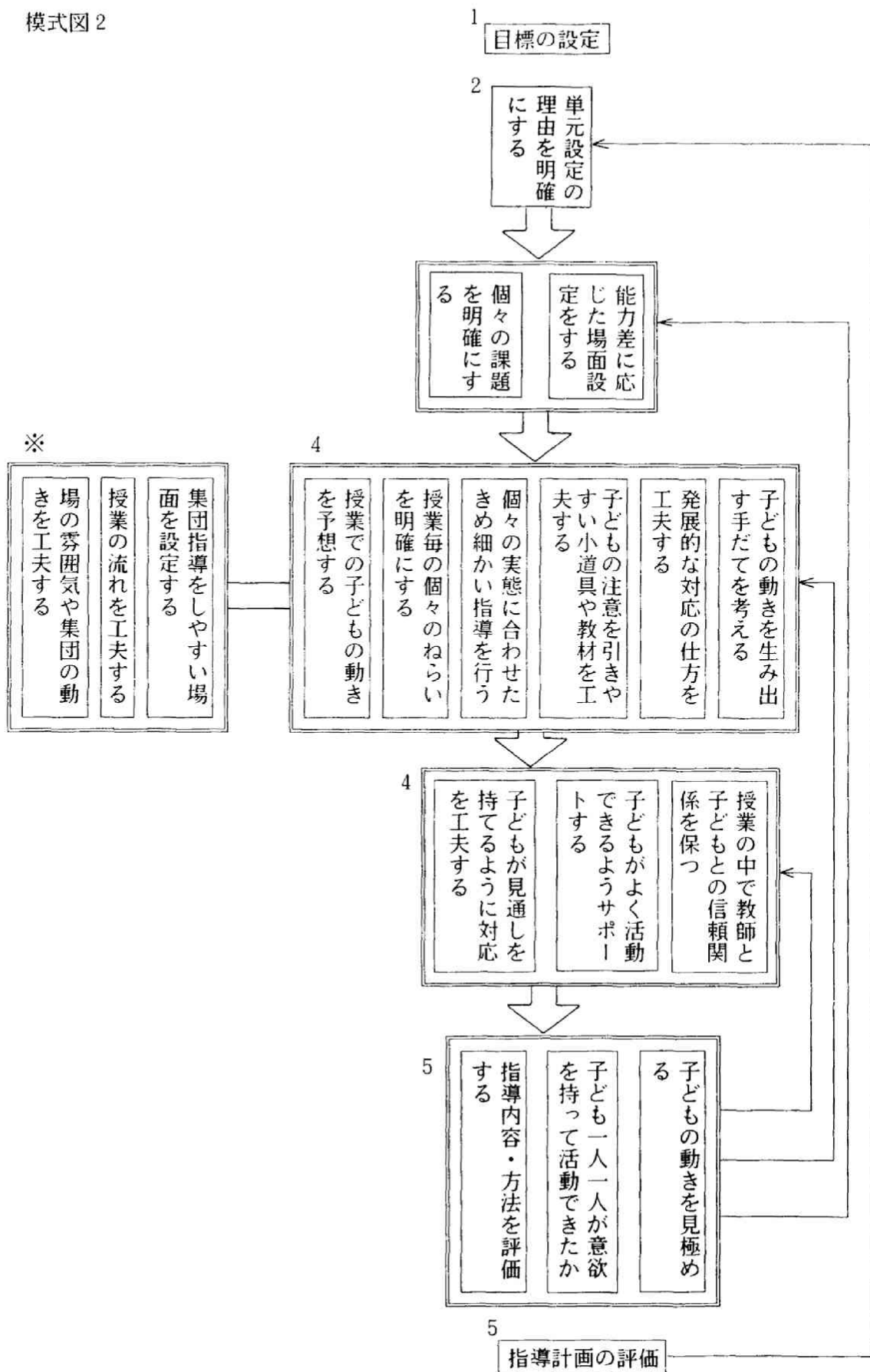
- ・授業の流れ……授業の流れは適切だったか
- ・個々の子どもの評価……一人一人が生き生きと活動していたか
- ・教師の対応……教師の対応は適切だったか
- ・指導の手だて……指導の手だてを適切だったか

10. 本時の指導計画の評価, ねらい, その他

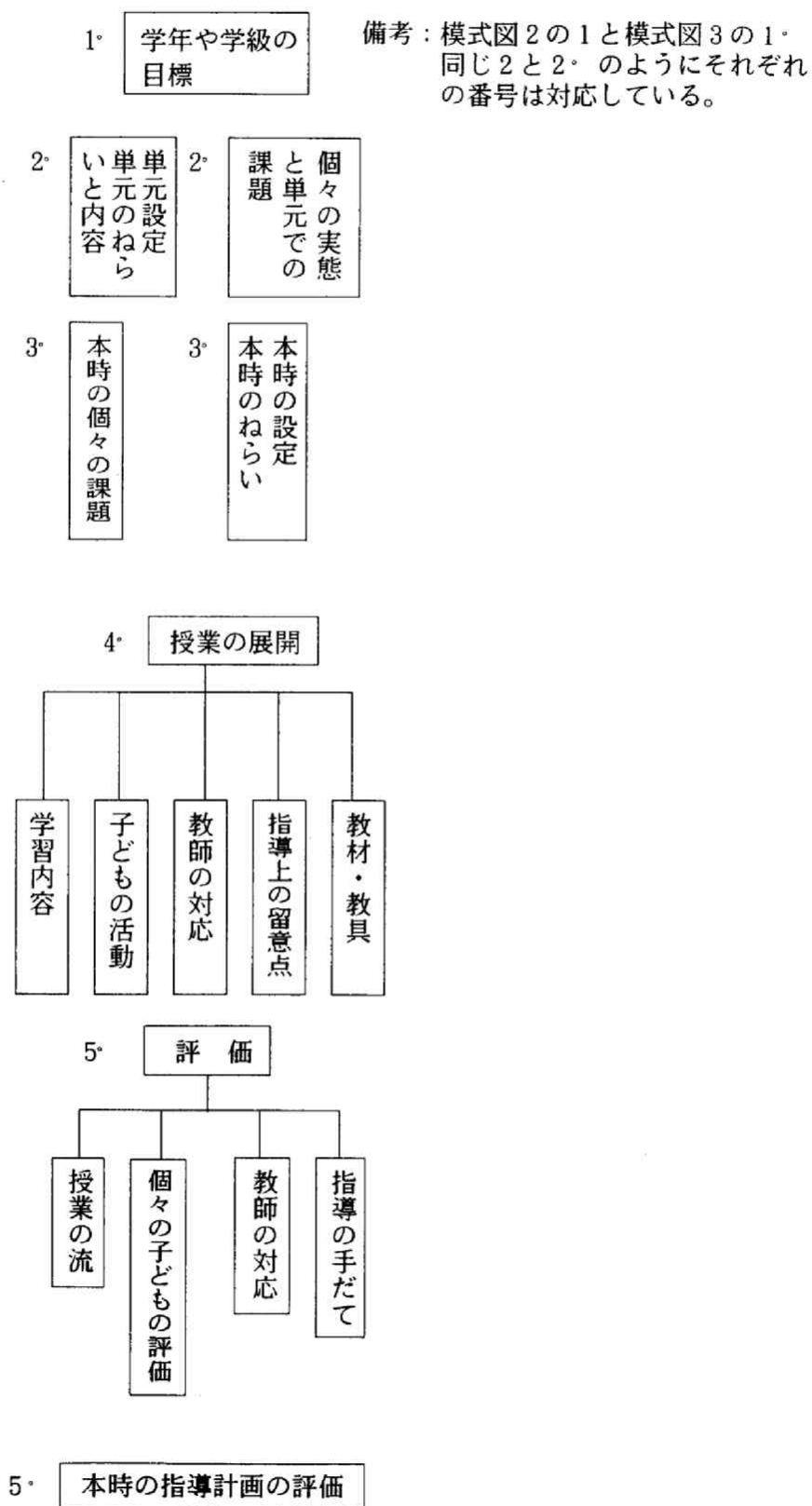
図1 本時の展開 10:00~

学習内容	子どもの活動	教師の対応	指導上の留意点	教材・教具
		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <p style="text-align: center;">黒板</p> <p style="text-align: center;">T 1 E</p> <p style="text-align: center;">T 2</p> <p style="text-align: center;">A B C D</p> <p style="text-align: center;">T 3</p> </div>		

模式図 2



模式図3



IV 指導事例

1 日常生活の指導（精神薄弱養護学校小学部）

(1) 題材名「ピアノに合わせて体を動かそう」

(2) 題材設定の理由

小学部の指導目標の「丈夫で動きの良い体や手指を育てる」、学年の指導の重点の「自分の課題を理解して、自分から取り組む」などを実現するためには、丈夫で動きの良い体を自分から作っていくことが大切である。

そこで、体を十分に動かし、楽しみながら基本的な運動パターン・様々な身のこなしを身に付けさせるために、日常生活の指導の題材として朝の運動に取り組むことにした。

大きな集団の流れを生かしながら、個々の課題に合わせて、適切な指導が実現されることが重要である。そこで子どもたち自身で動きの変化がつかめるように、ピアノの曲目を種目ごとに变化させ授業の流れを構成した。子どもが意欲を持ちやすいように、子どもに馴染みのある曲を選んだり、動物の動きの模倣を取り入れ、この題材を設定した。

(3) 指導のねらい

① 基本的な運動パターンを獲得する。② 音楽に合わせて楽しく体を動かす。③大きな集団の中で、自分から動こうとする。④ 持続して体を動かす。

(4) 指導計画

毎朝、小学部全員42名で、年間を通して行っている。二学期は走る時間を少なくし新しい種目に慣れることを課題にしている。

以下の表（授業の展開）のような種目をピアノ伴奏に合わせて一連の流れとして行っているが、その時によって、走る量を多くしたり、種目をカットしたり、順番を変えたりと、組み合わせは流動的にしている。

(5) 児童の実態と課題

名	児童の実態	児童の課題
A 児	自分の課題を理解することが苦手であるが、音楽は大好きで、雰囲気左右されやすく、乗りやすい。 周囲に気を取られて自分の課題を途中で中断したりすることもある。	流れに沿って、持続して体を動かす。 次の種目への切り替えを速くする。

B 児	周囲に気を取られやすいが、意欲的で自分の課題を意識できるようになってきている。 軽いまひがあり体が固い。 視覚障害がある。	自分のペースで、走り続ける。周囲に気を取られずに種目に集中する。
C 児	心臓疾患があり無理はできない。 はじめに飛ばしすぎて、後半疲れることが多いが意欲的である。	種目の切り替えの時、すぐに始める。 後半疲れてきても、できるだけ最後まで自分のペースで頑張る。

(6) 本時のねらい

- ・流れを意識して、体を動かし続ける
- ・ピアノに的確に反応して、自分から次の種目に取り組む。

(7) 本時の個々の課題と指導の手立て

名	児童の課題	指導の手立て
A 児	持続して走る。 集中して速く次の種目に移る。	走りの時声掛けで気分を盛り上げてしっかり走るようにさせる。 次の種目への切り替えを速くするため立ったり、しゃがんだりするときの介助や、簡単を指示をしてテンポを作れるようにする。
B 児	集中して一つ一つの種目に取り組む。 一人でできる種目を増やしていく。	気を散らさないで自分のペースで走れるように、時々教員と一緒に走る。 スキップやサイドステップは、教員が手を取ってテンポを合わせて行うようにする。
C 児	疲れてきても、気持ちを持続して頑張る。 周囲に気を取られずに自分のペースで自分の課題に集中して取り組む。	後半疲れてきても、歌を歌って励ましたりして、最後まで自分のペースで動けるようにする。 スキップは自分のスピードで行うように、教員が介助する。 手押し車は、周りのペースに合わせていく。

(8) 授業の展開

学習内容	児童の活動	教師の対応	指導上の留意点	教材・教具	
①ダッシュ 笛の合図で スタート (9:25分まで 走る) ②リズム (25分間)		①体育館の縦を笛の合図で集団で走る。	①笛でスタートの合図をする。「白い線、位置についてヨーイドン！」	①八割り程の子が走り切ったところで次の合図を明確に行なう。笛は簡潔に吹く。	①笛
1 走る		②ピアノの曲目に合わせて決まった運動や姿勢をして楽しむ	②合図の声掛けで、スタートする。「リズム頑張るぞエイエイオー」	②全員を注目させ、掛け声で気持ちを高揚させる。 ・いろいろな動きの間で「円の動き」「反対回り」「集合」「縦の動き」「走る」を随時折り混ぜる。 歌の所は大きな声で生き生きと歌って、雰囲気盛り上げる。	駆け足行進曲等
2 歩く		1 走る・止まる(ターン)	1 先頭にたって走る	1 教員が先に元気に走り雰囲気を盛り上げる	タンバリン 散歩トトロ より(歌)
3 後ろ歩き		2 歩く	2 一緒に元気に歩く	2 タンバリンでリズム・テンポを明確にする。	クワイマーチ
4 横転		3 後ろ歩き	3 一緒に元気に歩く	3 止まっていたり、斜めに歩いている子に補助して正しい方向を教える。	どんぐりころころ(歌)
5 手ブラブラ		4 寝たまま横に転がる	4 腕をバンザイの様に伸ばさせる。	4 一定の方向(始め東、後半は西)へ転がらせ、互いにおつからないようにする。始めに転がりやすい広いところで寝かせる。	トレモロ
6 両手を横に広げる		5 手をブラブラ	5 一緒に行なう	5 子供の目の高さや距離を意識して模範を示す。	とんぼのメガネ(歌)
7 両手を前に合わせ走る		6 両手を横に広げて走る	6 手を広げない子に見本を示す	6 生き生きと楽しんでいるように模範を示す。	めだか
8 はいはい		7 両手を前に合わせたまま走る	7 一緒に行なう	7 手を合わせるとき意識的に子供に模範を示して見せる。	おもちゃのマーチ(歌)
9 高ばい		8 はいはい(4つばい)	8, 9 大きな声で歌ったり、模範して示したりする。	8 一緒に並んだり、前でここまで頑張るよう励ましたりする。	おすもう まさん(歌)
10 しゃがんで前進		9 高ばい	10 一緒に進んで頑張るよう促す。	9 はいはいからの切り替えが出来ていない子に、補助して教える。	よちよちあひるさん(歌)
11 両足跳び		10 しゃがんで手を後ろに組み前進	10 一緒に進んで頑張るよう促す。	10 尖足やマヒでしゃがむ姿勢の苦手な子の姿勢やバランスを補助して教える。	うさぎ
12 腹ばい前進		11 両足をそろえてジャンプ	11 前で行なう事で、持続させる。	11 前に進もうとすると足が揃わなくなるのでゆっくり進ませ揃わせるようにする	王さまと私
13 仰向け四つばい		12 腹ばいになって前進する	12 足の蹴を補助する	12 蹴りの感覚を得られるよう手をあてがって補助する。	アラベスク
14 ボートこぎ		13 仰向けになって四つばい	13 持続するように一緒に進んで促す。	13 始めに仰向けになれない子に姿勢のとおり方を補助する。	お舟はぎ ちらこ(歌)
15 両手両足ジャンプ		14 尻をついて足を前に出し前後に反動をつけて進む	14 持続するように一緒に進んで促す。	14 動き方がしっかり身につけていない子は、前後に揺すって進む感を教える。	うさぎがピョン(歌)
16 集合		15 しゃがんだ姿勢から前へジャンプ	15 気持ち盛り上げるよう元気に歌う。	15 動き方がはっきりしない子はお尻を持ちあげてジャンプする感覚を伝える。	Full of Joy
17 大股歩き		16 集合	16 素早く移動して方向を分る様にする	16 リーダーは前の種目の進行方向へ集合させるように合図の笛を吹いたり、素早く移動しながら導く。	驚愕(ハイドン)
18 スライディング		17 大股歩き(ゆっくり)	17 オーバーなアクションで一緒にテンポを取る	17 せかせか歩く子にゆっくり落ち着いて合わせる様テンポを取ってあげる。	p. グリッサント
19 二人組になり歩いて集合		18 スライディング(寝る)	18 寝ていない子がいなければ確認してすぐ対応する。	18 子供同士がぶつからないように、位置関係を見る。	ぼかぼかてくてく(歌)
20 横歩き		19 二人組になって歩いて集合	19 全員組に成っているか確認し相手のいない子へ対応する。	19 テンポの合う子同士をペアにする。	赤いかに子が(歌)
21 サイドステップ		20 横向きになって歩く	20 歌を歌ってテンポを取りやすくする。	20, 21 後ろから腰等を支えて、体の横向きを保持する。	軽騎兵
22 スキップ		21 向かい合いサイドステップする	21 始めに二人組で向かい合わせる。	22 膝をあげることを意識して教える。スキップの前段階として片足だけさせても良い。	調子をそろえてクリック ククリック
23 手押し車		22 スキップ	22 腕を取りリズムに合わせて補助する。	23 止まらないように促したり、端までいったら持ち手を交替しているか様子を見る。交替しないときは指導する。	走れよ小馬(歌)
個々にブリッチ逆立ちを行なう		23 手押し車	23 途中で手を離したら持ちなおさせ頑張らせる。数を数えて目安を示してあげる		

(9) 評価

① 授業の流れ

集合前のダッシュの運動は全学年が集合するまでの時間を使い、児童に見通しを持たせるのに役に立っている。歌は児童の次の動作への判断の良い材料になっている。歌を歌うことにより、元気に頑張る雰囲気盛り上げている。

しっかりした集団の動きや流れ、勢いが、動きの遅い児童を引っ張り、気持ちを前向きにしている。しかし、動作の遅い児童への配慮には工夫の余地がある。個々の児童に合わせた動作を細かく検討する必要がある。

② 児童の評価（一人一人が生き生きと活動していたか）

A児は自分から動きにくく、次の動きに入りにくい。介助を行うことにより生き生きと参加できていた。

B児は活動的だが、まひのためきちんとできないところもある。まひに対しての援助を工夫する必要がある。

C児は曲の流れなどよく分かっている反面、先を見越して、運動をやめるのも早い。最後までやりとげられそうな種目を前もって決めておく必要がある。

③ 教師の対応

役割を明確にする。全体の動きがスムーズに流れていた。複雑な動きの種目になると、教師がついて介助や指示をしていた。

ほとんど全ての児童が終始授業に参加していたが、難しい動き（ゆっくり歩く、ジャンプ、両足跳び、サイドステップ、スキップ）などは教師の手が足りなかった。さらに児童に合った課題を設定し、児童が十分活動できるような過不足のない援助を考える必要がある。

④ 指導の工夫

姿勢の低い動きの時、教師が児童の前に立つことは威圧感を児童に感じさせやすい。児童の目の高さに合わせて指導することを心掛ける必要がある。

一人一人の児童に「～しなさい」など言わずに、歌を歌うことにより児童の気持ちを盛り上げている。補助の方法については、年度当初に研修会を設けて共通理解を図る。

(10) 本時の指導計画の評価

多くの児童が自分から取り組んでいたが、十分参加できていない場面もあるので、さらに個々の課題を明確にして、児童が十分活動できる指導場面の設定を考えていく。

2 生活単元学習（精神薄弱養護学校高等部）

(1) 単元名「自分の衣服を洗濯する」

(2) 単元設定の理由

本校では、毎朝の活動の一つとして、持久走（15分程度）を行っている。その時汗をかくのでマラソンの後に着替えるよう指導しているが、「なぜ着替えるのか」わからないまま着替えている生徒も少なくない。衣服の汚れについても関心が低く、中には学校で一度着て持ち帰った体操シャツをそのまま持ってくる生徒もいた。清潔ということを説明し理解させるのは難しいが、社会に出ていく上で、また体を健康に保つという意味でも身に付けて行かなければならない大切なことの一つである。清潔や衛生という事については毎日の生活を通して学級でも指導しているが、今回は自分の着た物を使って、家庭でも日常的に行われている洗濯を学級で取り上げることにした。

(3) 単元のねらい

- ① きれい・汚いを自分で判断し、汚れものを区別する。
- ② 手で洗う洗濯と洗濯機を使った洗濯の手順を覚える。
- ③ 衣服の汚れを意識し、清潔を心がけるようにする。

(4) 単元の学習計画

- 第 1 時 着替えの必要性と清潔の理解。汚れ物の区別。
- 第 2 時 洗濯の手順の理解。
- 第 3～4 時 自分のシャツの手での洗濯。
- 本 時 洗濯機と洗濯板を使ったシャツの洗濯。

(5) 生徒の実態と単元での課題

	生徒の実態	単元での課題
A 男	落ち着きがなくじっとしてられない。しかし好奇心も強く、何事にも意欲を持って取り組める。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で判断して、汚れた服を着替える ・洗濯の手順を理解する。 ・きれいにたためるようにする。
B 男	汚れたシャツを翌日また平気できてしまうことがある。家でも自分で洗濯しているが十分ではない。	<ul style="list-style-type: none"> ・洗濯の仕方、手順を覚える。 ・着替えから洗濯、管理まで、生活の中で、清潔を意識できるようにする。

C 男	自閉症。自分のパターンに強くこだわることもあるが、身の回りのことはほぼ自立できている。	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいと汚いの判断をできるようにする。 ・洗濯の手順を覚える。 ・集中して課題に取り組むようにする。
D 女	左半身にまひがある。片手が使えず、一部介助が必要。簡単な内容は言葉で伝えられる。	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいと汚いの判断をできるようにする。 ・洗濯の手順を覚える。 ・左手での押さえ方を工夫する。

(6) 本時のねらい

- ① きれいなシャツと汚れたシャツの区別をする。
- ② 洗濯に必要な物を覚え、自分で準備をする。
- ③ 洗濯機、洗濯板を使った洗濯の手順を覚える。

(7) 本時での個々の課題と指導の手立て

	生徒の課題	指導の手立て
A 男	汚れ物を区別する。 洗濯板で洗う、準備・片付けも自分でする。	触らせたり、臭いを嗅がせたりする。 洗濯に集中するよう頻繁に声掛けをする。
B 男	洗濯機を1台まかせ、準備から干すところまでを一人でする。	指示を出さず、表を見て自分で確認して進めるよう促す。
C 男	洗濯板でシャツを洗う。 準備から片付けまで自分で考えて進める。	周囲の友達や絵カード等を見て、自分で必要な物を用意するよう促す。
D 女	洗濯板での手洗いの準備をする。 左手も使って、洗濯板でシャツを洗う。	必要な物を絵カードで提示する。 左手を補助し一緒に洗濯板を押さえる。

(8) 本時の展開

学習内容	生徒の活動	教師の対応	指導上の留意点	教材・教具
①あいさつ	①あいさつ	①日直の生徒に促す。	①黒板に向かって半円形に座る。	
②きれい・きたない	②提示された物から、きれいな物・汚い物を選ぶ。	②用意したシャツの中から何点か取り出し選ばせる。選んだ理由を説明させる。	②全員に選ばせる。生徒によって難易度を変える。日常生活に結び付けて考える。	②昨日着ていた体操シャツときれいのシャツ
③洗濯の仕方	③準備：必要な物をあげ実際に用意する。 手順：絵カードで確認	③洗濯に必要な物を発表させ絵カードで確認していく。絵カードと同じ物を用意させる。字→絵の順で、生徒にカードを選ばせる。	③発言できない生徒にはカードを選ばせる。補助の教員は生徒の近くで声掛けしながら授業に意識を向けさせる。	③絵カード 洗剤 洗濯板 ハンガー 等
④洗濯〈洗濯機〉 (教員-生徒) T 1 { B男 E F	④B男、E、Fは洗濯物置場から自分のTシャツを持ってきて、各自洗濯機を使って洗う。 →脱水まで	④T 1が3人の動きを観察。間違いがあったときは、指摘する。	④指示は出さず、手順を書いた紙や、友達の様子を見て、自分で考え判断するよう促すが	④洗濯物・洗剤 昨日着ていた体操シャツ
〈洗濯板〉 T 2 { C男 A男 G	準備 洗濯板、洗剤、Tシャツを用意し、水をためる。	絵カードなども使いながら自分で用意させる。 水の量を示す。	間違いは、友達と比べさせて気づかせる。(水・洗剤の量・洗濯機の向き等) 汚れているところを確認しながら洗う。 指先はきれいか	絵カード 洗剤・洗濯板 昨日着ていた体操シャツ
T 3 { H D女 I	洗う 終わったら、教師に見せてから次のを洗う。	うまくできない生徒には、手を添えて一緒に洗う。 洗い終わった物を確認する。 手を添えてやってみせる。	泡、ぬめりを意識させる 数を数えながらすすぐ。(時間)	
T 4 - J	すすぎ きれいな水に入れ換えてすすぐ(2回) しぼり 1枚ずつしぼる。	きつくしぼれるよう声かけをする。	手の握り、腕の曲げ延ばし	
⑤干す	⑤全員で洗濯物を決められた場所に干す。	⑤できるだけ自分のやり方で干させる。	⑤しわになったり、のびたりしないように気をつける。	⑤洗濯ばさみ 物干し竿、 名札ハンガー
⑥まとめ	⑥干した洗濯物を比べる。 洗濯物を見直し、まずいところがあれば直す。	⑥適当な物を選んで、生徒に比較させ、良い所・悪い所を生徒に指摘させる 個々への指示は出さない。	⑥自分が着るときのことまで考えさせる。 比べて、自分で気づかせるようにする。	

(9) 評価

① 授業の流れ

洗濯の一連の活動を、自分のシャツを使って始めから終わりまで通したことは、生徒

にとって見通しが持ちやすかったようである。洗濯の場面では、一人一人の役割と場所を明確にしたことで、より集中して取り組めた。干す場面では、全員が一斉に行うことにより、生徒同士が比較し合いながらできた。

② 生徒の評価

A男：自分の分かる範囲では積極的に取り組んでいたが、少しでも難しくなると考えようとしなくなる。洗濯（手洗い）は途中で水で遊んだり友達に手を出したりといった行動もあったが、自分なりに手順は理解しており準備などもできている。一つ一つの作業を、もう少し丁寧にできるとよい。

B男：家でも洗濯していることから、洗濯機の使い方・手順は大体理解できている。細かな点で自信がないためか慎重になりすぎているので、見通しを持てる活動はどんどんやらせて自信を持たせることが必要である。

C男：耳を押さえて聞いていないようなところもあるが、絵カードなどの課題を与えるときちゃんと答える。隣の友達のやり方に左右される場面もあったが洗濯（手洗い）は、一つ一つ丁寧にできている。また、準備・片付けも全体の流れを見てやれていた。

D女：発言・行動に移るまでに時間がかかるが、大体の手順はつかめている。洗濯（手洗い）も、一人で準備して始められる。短時間だが、意識して左手で洗濯板を押さえていることができた。全体を通して、まだ教師の声掛けが必要である。

③ 教師の対応

リーダーの教師は一人一人の力に合わせた質問を全員に用意しておき、リーダー以外の教師は生徒の反応に注意し個々に必要な手だてを行う。洗濯の仕方は、より生徒の実態に合った洗い方の工夫が必要である。

④ 指導の手だて

絵カードは手順を説明する場面だけでなく、道具の置き場所の指示等実際の洗濯の場面でも使っていくようにする必要がある。悪い干し方で乾いたシャツの例示は分かりやすく、生徒は乾いた時を意識して干すことができた。

(10) 本時の指導計画の評価

自分の物を自分で洗濯し、それをまた自分で着るということで、生徒は洗った後を意識し、より集中して取り組むことができた。また、それを生徒同士が比較し合うように進めたことで「きれい→清潔・かっこいい」、「きたない→不潔・かっこわるい→恥ずかしい」という意識を引き出すことができた。しかし、洗濯の技術的な力は不足しているため、今

後は学習したことが家庭での実践に結びついていくようにしたい。

V まとめ

集団の活性化を図るためには、授業の中で一人一人の活動が意欲的に行われているかという点が重要視される。そのためには、意欲を引き出す側である教師がいかに集団の中で、一人一人に焦点を当てた指導の工夫をしているかということに尽きると思われる。

そこで、できるだけ授業を細かく分析し、集団の中で一人一人を生かす指導の手だてがどう図られているのかという視点に立って、KJ法を活用して、モデル指導案を立て、授業研究を進めて行った。

進めて行く過程で、ビデオを見る観点をKJ法を用いて整理したことは、図②③を作成する上で役立った。そして、研究授業の指導案作成で図②③を実践に当てはめ、要点を絞ってフィードバックすることができるなど、指導案作成と評価の両面で活用できる良さがあった。その際、大きな4つの項目を綿密に検討した結果、以下の点が主に大切であることを授業後の反省をもとにして確認した。

1 課題設定について

- ・授業において、一人一人の課題を明確にするためには、実態を正確に捉え、目標（学校・学年・学級・単元）に基づいて、ねらいや指導の手だてを考える等、個々の実態とねらいが合うようにする。
- ・一人一人の能力差に応じることができるように、課題を細かく設定する。そのためには、興味・関心を引き出しやすいものから導入する。
- ・個別の目標は具体的に設け、自ら見通しを持ちやすい（取り組みやすい）ものにするなどそれぞれの動きが活発になるように設定する。
- ・授業終了後、結果に対して反省点や満足感、成就感が得られるようにする。

2 指導の工夫について

- ・集団における活動の中にも、一人一人に応じたねらいを設け、場面設定をするとともに、個々への課題の手だてを明確に捉えて指導する。
- ・自主的に活動する場面を設けるために、授業全体の流れを分かりやすくし、見通しを持つようにする。例えば、授業の流れを固定化・反復することも必要である。
- ・授業の展開に応じて、能力別、課題別にグループを編成し、個々への手だてをしやすいように工夫したり、同じ課題を与えることにより他を意識した行動につながられるように、集団でのグループづくりに配慮する。

- ・授業毎の個別のねらいを明確にし、授業の山場を的確に捉え、指導する。
 - ・一人一人に意欲を持たせるためには、個々にとって具体的で分かりやすい教材・教具を取り入れ、自主的な行動を生む手だてを工夫する。
 - ・一人一人が見通しをもちやすいように指導の手順を明確にする。また、教室の環境整備においても、教材の配置や数など個々のねらいに対応させる。
- 3 教師の役割分担、共感関係について
- ・個別のねらいを明確にし、教師同士の共通理解を図る。そして、授業の中で一人一人が課題を持って取り組めるように過不足のない対応の仕方を考える。
 - ・教師の役割分担を明確にし、教師が指導する位置も細かく考慮する。児童・生徒が集中できるようにリーダーはできるだけ一人にし、他の教師は個々の子どもの反応を見ながら細かに対応する。
 - ・教師は児童・生徒との親和的な関係ができるように努める。

VI 今後の課題

本分科会は、「集団の中で一人一人を生かす」ことが、集団全体を活性化していくという仮説を立て、研究を続けてきた。授業研究を通して、集団での指導の中にも個に応じた指導が必要で、指導の手立てを尽くせば、児童・生徒の学習意欲を引き出せることが分かってきた。このように、個に応じた指導は、一人一人の児童・生徒の興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を育てるという「新しい学力観」にもつながる。

今年度は、集団の中での個別指導に焦点を当てて研究をしてきたが、個々の指導を更に充実させるためには、集団での指導の方法そのものも、もっと検討される必要がある。

そこで、今後の課題として集団全体の動きがどのように個々に影響を与えるのか、また一人一人を生かす指導をするためには、どのような形態で集団の指導をするのが適切かということも明らかにする必要がある。

今年度の研究の成果を更に発展させるためには、①一人一人の児童・生徒を重視するとともに、集団の中で横のつながりである子ども同士のかかわりを通して集団の活性化を図るにはどうしたら良いのか、②集団全体のレベルアップを図るには授業の流れをどのように作っていけばよいのか、③集団指導における場面設定・授業の流れ・場の雰囲気など、それらの相互的なかかわりをどのように調整すれば、一人一人を生かす授業となるのか、などを明らかにする必要がある。

児童・生徒の障害の状態に応じた養護・訓練の指導

——「意思の伝達」の指導を中心として——

I 主題設定の理由

本分科会は、盲・ろう・養護学校（肢体不自由、精神薄弱）と心身障害学級の教員10名で構成されている。各研究員の担当している児童・生徒の障害種別や学部等が様々であるため、研究テーマの設定に当たっては、各自学校における養護・訓練の指導の問題点や事例を持ちより、全体として共通する課題を検討してきた。

各研究員から出された課題等は、①障害の非常に重い児童・生徒へのかかわり方、子供のサインの見方について、②意思の伝達の方法の改善、③対人関係、心理的適応に問題のある児童・生徒への指導の在り方の3点まとめられ、この三つの課題から次のような検討がされた。まず、上記の課題は学習指導要領における養護・訓練の「意思の伝達」あるいは「心理的適応」の領域である。しかし、この2領域は切り離して考えられず、また、「心理的適応」の問題は、意思の伝達が不十分であるために起こることも多い。したがって「意思の伝達」の指導を中心に、併せて心理的適応の面をも考慮した指導について研究することとし、上記の主題を設定した。

「意思の伝達」の指導については、昨年度も研究主題として検討されているが、一人一人の実態等に即した障害の改善、問題への対応という点では課題が残っていた。この点をさらに探求し、「個々の発達課題は何か」という視点で研究を進めていく必要があると考えた。

以上から、今年度の研究は、昨年度の成果を参考としながら、上記①～③の発達課題により3グループに分かれ、児童・生徒の一人一人の課題に応じた「意思の伝達」の指導の在り方や指導内容・方法の工夫について研究することにした。

II 研究の方法と経過

5月～6月 各学校における養護・訓練の位置付け、指導計画、指導事例の報告、昨年度の研究員報告書や学習指導要領などの読み合わせや話し合いを行い、養護・訓練の共通理解を図った。そして研究テーマを検討し、決定した。

7月～8月 各グループごとに指導事例の実態把握、指導計画、指導内容・方法について整理した。これらを基礎とした各自の実践を持ち寄り検討した。主題の考え方を全体でまとめた。特に、実態把握に焦点を当て討議を深めた。

8月～11月 指導事例の指導案を持ち寄り検討した。研究授業を行い仮説を検証した。グルー

ブ毎に報告し、全体で話し合いをしてまとめた。原稿の執筆と検討。
12月～2月 報告書の原稿校正，研究発表の内容検討，準備，練習，発表会。

Ⅲ 研究の内容

「意思の伝達」のとらえ方については、昨年度の養護・訓練分科会と同じ方向で考えていくことを確認し、研究の内容を図1のように整理した。

1 的確な実態把握のために

意思の伝達においては、教師が児童・生徒の意思や要求などを的確にとらえることが、指導計画を立て、指導内容・方法を明らかにしていくうえでの基礎となる。実践の中でも、児童・生徒とかかわりながら様々な表現を手がかりとして反省・評価をし、計画・内容を見直すことが重要である。今年度はそのような考えを基に実態把握を中心に研究を深めた。実態を把握するに当たっては、年齢・主障害・生育歴・教育歴・発達診断等による発達の側面の様子、家庭の状況等の基礎的データを集め考えていくとともに、以下の4つの視点が重要である。なお、実態把握が主観的にならないように、児童・生徒に接する人と常に連携し、複数担当者の目で客観的にとらえる必要がある。

(1) 対人関係がどうなっているか

児童・生徒の身近な人とかかわり（親・兄弟・担任等）、より広い範囲の大人とかかわり（他クラスの担任等）、友人同士など対人関係の実態とどのようなかかわりを持ち、どのような意思疎通の方法をとっているかなどを把握することが重要である。それらを踏まえ、教師が様々な働きかけを通して、さらに児童・生徒との関係を理解することが大切である。

(2) 要求の表し方（発信者の表現力）をどうつかむか

児童・生徒の表現は弱かったり、的確でなかったりすることも多い。教師はゆったりと見て、わずかな表情や視線の変化・身振り、またパニック等あらゆる行為・行動を見逃さずにとらえ、外に現れていることを手掛かりとして何を要求しようとしているかを考える必要がある。そのために、その場で分からない場合などは記録をとり、その後の生活や学習の中で理解するよう努めたり、親や他の教師と共に考えていくことが大切である。例えば、「自転車に乗りたい」と表現した場合、それは、自転車に乗せて欲しいだけでなく、その裏に「先生と一緒にいたい」という要求が含まれていることもある。このように、児童・生徒の内面を考え理解し実践する必要がある。

(3) 要求の受け止め方（受信者の理解力）をどう知るか

教師等の働きかけに対して、児童・生徒の受け止め方は図1の①～⑥のような様々な場合が考えられる。この時注意しなければならないことは、教師の言葉を理解して行動しているのか、まわりの様子や教師の身振りを見て行動しているのか、日課等の中で習慣的に行動しているのか等、何を手掛かりとしているのかを明らかにすることである。そして、内言語等を含む児童・生徒の理解の様子を記録に取り、実践の中で整理していくことが大切である。

(4) 相互伝達（発信-受信-発信・フィードバック）はどのような時に行われるか

児童・生徒とのやり取りの繰り返しだが、だれと、どのような時に、どのような内容・方法で行われているかを知る必要がある。

2 指導計画の作成に当たって

実態把握を手掛かりに図1の指導計画①～③を押さえ、短期的な目標だけでなく長期的な目標も設定していく。また、家族の願いや思いを受け止め、教師の共通理解を図りながら作成することが大切である。

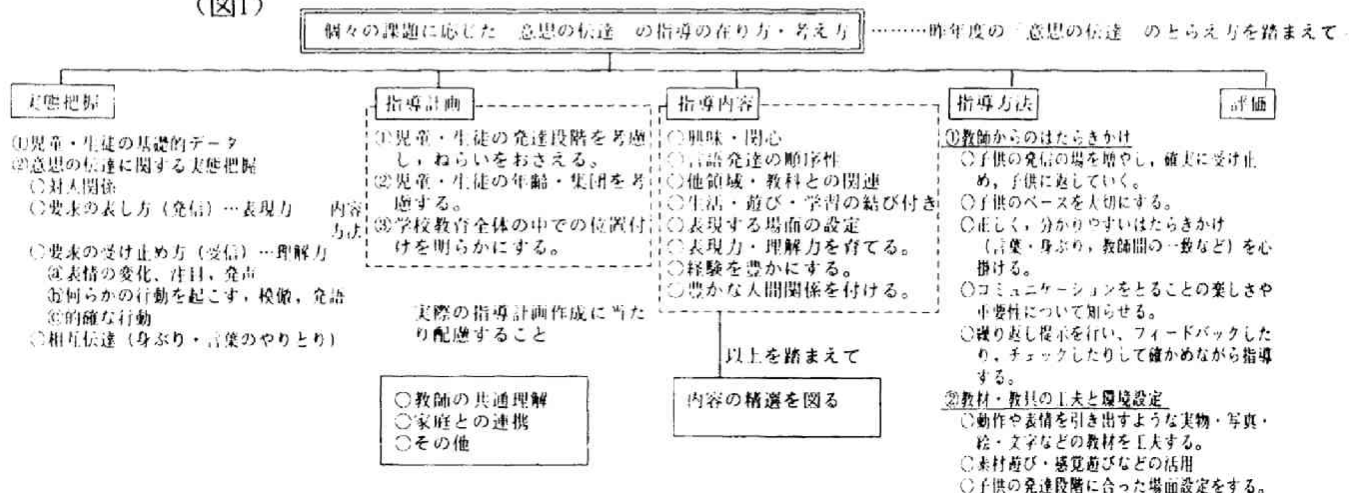
3 指導内容の選定に当たって

児童・生徒の実態によって異なるが、図1の「指導内容」に表した視点を持ち、年齢・発達段階をおさえ、どのような経験を系統的に組織するかということが重要である。

4 指導方法の工夫について

環境の設定や教材・教具の工夫が重要であるということはいうまでもないが、意思の伝達においては教師の児童・生徒に対する分かりやすい働き掛けが重要である。集団で動くことだけに目を奪われることなく、一人一人の児童・生徒が自分のペースで表現できるよう、教師の待つ姿勢が大切である。また、形成評価の視点を持ちながら進めることも必要である。

(図1)



VI 指導事例

1. 事例1－表情や身振りによる意思の伝達を習得させる指導（Lグループ）

(1) 本グループの指導における重要点

本グループの児童・生徒は、登校から下校まですべて養護・訓練に関する指導を必要とし、学習の中心は遊びを中心にした、いわゆる感覚レベルの学習内容であり、個別・小グループで行っている。指導に当たっては、なるべく小さな刺激から始め、児童・生徒の反応をじっくりとらえ、どのような時に教師の言葉を受容し、身体のどの部位を用いて発信しているか、その発信が何を意味しているのか等を見極め、その都度、適切な言葉かけ（共感や承認など）をし、繰り返しの学習を行うことにより、一つのサインとして獲得させることができると考える。そして、そのサインを相互伝達へと結び付けられるように、さらに、特定の人だけではなく誰とでも相互伝達ができればと考えて指導している。そのため、教師の思い込みの指導とならないように、ほほ笑み、手の動き、まばたきなどの児童・生徒のほんのわずかな反応をも見逃さず、多くの教師の目でとらえ、情報を共有し合うことが大切である。

以下、肢体不自由養護学校（B養護学校）小学部における指導事例である。

(2) A児の養護・訓練の個別指導計画

児童名	A児（男子）	年齢	9歳（小3）	障害	脳性まひによる四肢体幹機能障害、精神薄弱、てんかん
児童の実態	<p>身体の健康……生活リズムは比較的安定している。舌根沈下などにより呼吸機能低下が見られる。</p> <p>心理的適応……環境の変化に敏感であるが、極端な不適応状態に陥ることはほとんどない。</p> <p>環境の認知……視覚は明暗を感じているが、はっきりとした追視は見られない。聴覚は、慣れた人の声やグロッケンなどの音などに対してその方向に顔を向ける。</p> <p>運動・動作……首の座りも弱く、四肢も自発的な動きはほとんどない。</p> <p>意思の伝達</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝達行動……身体を無理に動かされたり、顔を触られるなど本児にとって不快なことに対しては、目をパチパチさせたり、顔をしかめる。気持ちがよいと思われる時には「アーアー」と発声し、笑顔が見られる。慣れない環境・状況では表情もさえず、顔をしかめていることが多い。 ・対人関係……自分から人にはたつきかけすることはない。慣れた環境（家庭や小集団による学習など）の中では、声かけに対して、その方向に顔を向けたり、「アーアー」と声を出して応える。 ・遊び……自らおもちゃなどにかかわって遊ぶことはないが、グロッケンなどの音を聴いてにっこりと笑うこともある。揺さぶり遊びに対しては、姿勢を安定させ、ゆっくり揺さぶると笑顔や声が出るようになってきた。 				
指導目標	<p>長・中期目標……四肢・体幹の変形・拘縮を防ぐ。 （年間～学期）教師のはたつきかけをしっかりと受け止め、様々な遊びを楽しめるようにする。</p> <p>短期目標……関節の屈曲・伸展や姿勢の変換の機会を増やす。 （月～週）慣れた教師の声かけや遊びの中で笑顔や声がたくさん出るようにする。</p>				
指導内容	<p>養護・訓練の時間の指導……『身体の健康』『運動・動作』を中心に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他動的に関節の曲げ伸ばしをしたり、仰臥位→横臥位→腹臥位→座位…と徐々に姿勢を変換する。 ・他動的に胸郭を広げながら、呼吸訓練を行う。 <p>養護・訓練に関する指導……『環境の認知』『意思の伝達』を中心に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わらべ歌をベースに視覚・聴覚・触覚にはたつきかけたり、揺さぶりを行う。 				
指導方法形態	<p>養護・訓練の時間の指導……養護・訓練教諭と連携をとりながら、1対1の個別指導を行う。</p> <p>養護・訓練に関する指導……同様の課題を持った児童と複数の教師による小集団指導を行う。</p> <p>教育課程全般にわたって……個別指導をベースに、少しずつ集団の規模や活動に変化を加えるように1日、1週間…年間の計画を作成する。</p>				
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・四肢の動きや変化に対する緊張の度合いはどうか。 ・教師のはたつきかけや視覚・聴覚・触覚などに対する反応はどうか。 ・環境の変化（個別←→集団）の中で、緊張の度合いや刺激に対する反応はどうか。 				

(3) 養護・訓練の位置付け（授業研究は、「朝の活動」）

	月	火	水	木	金	土	
1	朝の活動 〔小集団〕 ⑤（☆） ③	課題別学習 〔個別〕 ④（☆） ①③⑤	養護・訓練 〔個別〕 ③（☆） ④⑤	朝の活動 〔小集団〕 ⑤（☆） ③	養護・訓練 〔個別〕 ③（☆） ④⑤	朝の活動 〔小集団〕 ⑤（☆） ③	○授業名 ○授業の形態 [] ○養護・訓練の内容 ①身体の健康 ②心理的適応 ③環境の認知 ④運動・動作 ⑤意思の伝達 （☆主たる内容） ○他領域・教科との 関連——
2	見る・聞く 〔小集団〕 ③ （☆） ⑤	合同音楽 〔集団〕 ②⑤（☆） ③ 音楽	合同体育 〔集団〕 ②④（☆） ③⑤ 体育	課題別学習 〔個別〕 ④（☆） ①③⑤	感触遊び 〔小集団〕 ③（☆） ⑤	運動・散歩 〔小集団〕 ①④（☆） ②⑤	
3		遊び 〔個別〕 ③（☆） ④⑤	遊び 〔個別〕 ③（☆） ④⑤				
4	摂食指導〔個別〕①（☆）、②						
5	学級活動 〔集団〕 ②⑤（☆） 特別活動						

(4) 目標と方針（意思の伝達に関する内容について）

① 目標

- ア 長期・教師の言葉かけやはたらきかけをしっかりと受け止め、遊びを楽しめるようにする。
- イ 短期・教師の言葉かけや揺さぶりなどはたらきかけに気が付くようにする。
- ・教師の言葉かけに対し、声のする方向へ顔を向けるようにする。
 - ・教師の言葉かけやはたらきかけを受け止め、表情の変化や発声で応えるようにする。

② 指導の方針

- ア わらべ歌遊びに重点を置き、心地よいと感じられるようなはたらきかけを多くし、快の状態をはっきり感じ取ることができるようにする。そのためには、本児が働はたらきかけをしっかりと受け止めることができるように、以下の点に留意する。
- ・授業の流れを一定にし、長期に取り組む。
 - ・本児がはたらきかけを受け止めやすい姿勢を工夫する。
 - ・刺激が煩雑かつ過剰とならないようにする。
 - ・はたらきかけに対する反応をじっくりと待ち、その反応に対して教師が共感や承認

したことを適切な言葉かけにより本児に返していく。その際、細かな変化を見極める教師の技量を高めることも必要である。

- ・はたらきかけの「始め」と「終わり」を明確にし、本児がサインを出しやすい場面を設定する。
- ・遊びに流されないように、本児のペースを大切にする。

イ 小学部低学年ということもあり、まず特定の教師と1対1の関係を築くことが必要であると考え、個別指導に重点を置く。

ウ 前記に加え、徐々に特定の教師との関係をベースに個別的な配慮をしつつ、小グループ(集団)指導も少しずつ取り入れていく。

(5) 授業の形態等

「朝の活動」(毎週月・木・土曜日 9:20~10:00)

特定の教師とのかかわりをベースにした児童12名(教師8名)によるグループ指導で行う。個々のはたらきかけについては1対1の個別で行う。

(6) 指導の内容

ア わらべ歌をベースに様々な感覚にはたらきかけながら行う。

イ 視・聴覚遊び……児童の目の前で鮮やかな色の布を振ったり、顔に掛けたりする。また、パネルシアターを演じる。

ウ 触覚遊び……児童の指を順に閉じたり、開いたりする。また、顔に触れたり、おなかや脇をくすぐったりして遊ぶ。

エ 固有感覚遊び……児童を抱っこや膝の上に乗せた状態で、またシーツを使って、前後・左右・上下に体を揺さぶる。

(7) 年間指導計画

年間を通して一定の流れで行う。上記(6)に示した3つの遊びを取り入れて、ゆったりとしたはたらきかけから、よりダイナミックな働きかけとなるように展開する。3つの遊びを同時に変えることはせず、少しずつ内容に変化を加える。

(8) 単元指導計画

① 単元名 『わらべ歌を使ったやりとり遊び』

② 単元設定の理由

わらべ歌遊びは、歌に合わせて様々な感覚にはたらきかけることができ、体を揺さぶったり、歌詞に強弱・抑揚・速度の変化を付けることもできる。さらに、本児のペースに合わせた直接的なはたらきかけ(教師による触刺激や揺さぶり、歌いかけなど)が可能であり、また本児の細かな表情の変化を教師が受け止めやすいことから、この単元を設定した。

(9) 授業案

本時のねらい		<ul style="list-style-type: none"> ・教師の言葉かけに対して、声のする方向に顔を向ける。 ・教師の言葉かけやはたらきかけに対して、笑顔や声を出して応える。 				
区分	指導内容	学習活動	指導上の留意点	本児の活動	留意点	
本 時 の 学 習	導 入	歌「たんぼぼ」	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて静かに揺れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスできる姿勢で参加する。 ・始まりが意識できるように言葉かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて静かに揺れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの音に集中しやすいうように姿勢を安定させる。
	展 開	歌と動作「ゆらゆらタンタン」	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に揺れたり、伸びたりするなど身体を動かす。 ・教師の動作をまねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・無理に身体を動かさない。 ・動作模倣できる児童には、言葉かけしながら教師が目の前で動作をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に揺れたり、伸びたりするなど身体を動かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張が入らないようにゆっくり身体を動かす。
展 開	見 る・聞 く遊 び 「だるまさん」	<ul style="list-style-type: none"> ・布の動きを見たり、風を感じたりする。 ・教師とにらめっこをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の目の前でゆっくり布を動かす。 ・にらめっこではしっかりと目を合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・布の動きによる明暗の変化などを感じる。 ・歌いかけを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はたらきかけに集中しやすいうように姿勢を工夫し、安定させる。(後方支え座位や横抱きなど) 	
	手 遊 び 「ここはてっくび」	<ul style="list-style-type: none"> ・手指、掌や指に触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掌や指にしっかり触れる。 ・目を合わせながら行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手指、掌や指に触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1回1回児童の表情の変化をとらえ、笑顔や声が出た時にはほめ、もう1度行うなどする。 	
	揺 さぶ り遊 び 「ばったんばったん」	<ul style="list-style-type: none"> ・抱っこや膝の上で揺れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・揺さぶる際の姿勢や揺れる方向、強弱は個々の児童に応じて変える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・変化(縦横や強弱)を加えながら揺れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 揺さぶり遊びでは、揺れが過度にならないように気を付ける。 	
ま と め	歌「これでおしまい」	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて静かに揺れる。 ・歌に合わせて声を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リラックスできる姿勢で参加する。 ・終わりが意識できるように言葉かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて静かに揺れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの音に集中しやすいうように姿勢を安定させる。 	

(10) 指導経過

わらべ歌遊びの内容には少しずつ変化を加えたもののほぼ一定の展開の中で、しかもゆったりとした流れの指導を行った。新しいわらべ歌遊びを取り入れることに戸惑いの見られた本児も、何度か繰り返すことにより笑顔や発声も徐々に見られるようになってきた。

(11) まとめと課題

本児は、日常的に健康面での配慮が必要であり、また環境の変化に敏感である。そのため、体調や生活リズムを整えることを基礎に置きながら、指導方針や内容及び形態を工夫しながら設定することにより、様々なはたらきかけをしっかりと受け止められるようになり、個別指導の場面ばかりでなく、小集団の中でも笑顔や発声が見られるようになった。

しかし、小集団での一斉指導では、全体の流れにとらわれて授業が進行しがちであったという反省に基づいて、本児のペースをより大切にできるような授業の展開を今後検討していきたい。また、意思の表出が不確実な本児にとっては、笑顔や声の表出を確かなものとするかわり(強化・般化)が十分にできないこともあるので、小集団指導の中での成果を個別指導に戻して相互伝達を確実なものとするのが今後の課題である。

2 事例Ⅱ－表現手段の確立・拡充をめざした指導（②グループ）

(1) 本グループの指導における重要点

本グループの児童・生徒は、重度の精神薄弱や盲・ろうと精神薄弱を重複する障害があり、何が主たる障害であるかをとらえ、障害に応じた配慮及び指導をすることが大切なグループである。言語は不明瞭であるが、教師等とのコミュニケーションはなんとかとれる段階であり、自分の気持ちや意思をより一般的な手段で伝えようとする、相手の気持ちや言葉を理解しようとする、自分から積極的にはたらきかけることが課題である。

そのため、表現・伝達手段としての身振り、指差し、指文字、手話、絵カード、音声等を確立させるとともに、文字・言葉などの、より抽象的な手段への拡充を図ることが大切であると考え。以下、精神薄弱養護学校（D養護学校）小学部の指導事例である。

(2) C児の養護・訓練の個別指導計画

児童名	C児(女子)	年齢	10歳(小5)	障害	精神薄弱 てんかん
児童の実態	身体健康…生活のリズムは整っている。てんかんの発作のために服薬。 心理的適応…発語はないが、友達を意識して、一緒に行動しようと積極的である。 環境の認知…繰り返しの学習により、パターンを身に付けていく。学校生活の一日の流れは大体理解している。 運動・動作…右半身に軽いまひがあるが、日常生活には不自由しない。 意思の伝達…表情や身振り・発声で自分で気持ちを伝える。日常生活の簡単な指示は理解でき、的確ではないが行動しようとする。				
指導目標	長・中期目標…自分の意思をより正確に相手に伝えられるようにする。言葉がけに対して的確に応じられるようにする。 ・基本的生活習慣の自立を図るための動作・概念を育成する。 短期目標…指示に従って、身近な物や動作の絵・写真カードを取れるようになる。				
指導内容	関する指導において ・日常生活の指導を通して、生活に必要な手の操作力を高めるとともに、指示理解や意思表示を確実にする。 ・体育やマラソンなどの活動を通して、動作をまねる、一緒に行動する。体力を付けるとともに、基本的な体の動かし方を知る。 ・調理や買物等の活動を通して、物の選択・交換、あいさつ等の会話等をする。 時間の指導において ・絵・写真カードを使って、指示された物を選択したり、欲しい物などを意思表示したりする。				
方法・形態	課題学習での小集団指導 ・先生と言葉でのやりとりを楽しみ、集中して課題に取り組む。 ・絵カードなどを使って、内言語を増やし、コミュニケーションに役立てる。 基本的生活習慣を身に付けるために ・マークをつける、扱いやすいものにするなど道具の工夫。 ・見通しをもって行動できる環境の工夫。				
評価	(観点) ・集中して課題に取り組み、指示にしたがって絵・写真カード等が取れるようになったか。 ・カード等を通して、意思表示をしようとする意欲や態度が育ったか。				

(3) 養護・訓練の位置付け（授業研究は「課題学習」）

月	火	水	木	金	土
日常生活の指導（衣服の着脱・排泄・係り活動）①②⑤					
朝の運動④ 課題学習③⑤	朝の会 ②③⑤	朝の運動 課題学習	朝の会	朝の運動 課題学習	朝の運動 課題学習 朝の会 集会 集団遊び そうじ 等
朝の会	調理 学習 ②③⑤	朝の会	歩行 学習 ④	朝の会	
体育 ④		音楽 ②③		図工 ④	
給食指導・歯みがき・係り活動 ①③⑤					
遊びの指導 ②④				※	
リズム 運動④	※		リズム 運動	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 養護・訓練の5つの柱 ①：身体の健康 ②：心理的適応 ③：環境の認知 ④：運動・動作 ⑤：意思の伝達 </div>	
課題 学習③⑤			集団 遊び②⑤		
※			※		

※は、日常生活の指導で帰りの会

(4) 学習指導計画

① C児の実態（意思の伝達に関する内容）

人とのかかわりを積極的に好むが、力の加減が分からず小さい友達の頭を叩いたり、無理やり手を引っ張ったりすることがある。遊びでは大人とのかかわりを求め（自分からはあまり遊びを見つけられない。遊びの内容よりも大人とのかかわりが楽しいようである。）、一緒に自転車に乗ったり、ままごと遊びをする。発声は盛んであるが、興奮すると嬌声になり、ふだんも意識的な発声はなかなかでない。指差し、身振りは盛んで、自分の意思を伝えようとする。簡単な指示には従えるが（トイレに行こう、座って、など）、言葉の意味を理解しているのか、場面や教師の身振り、表情から判断しているのか、はっきりしないことがある。

② 目標と方針

ア 長期…内言語を増やす。自分の意思を絵カードや写真、身振りサインを使って相手に伝えられるようにしたり、言葉がけに対して意味を理解して応じられるようにする。
イ 短期…指示に従って、身近な物の絵カードや写真を取れるようになる。緊張しやすいので、楽しい雰囲気の中でリラックスして行われるようにする。自信を持って絵・写真カード取れるようにする。

③ 授業の形態等

「課題学習」 週1回 月曜日（1：50 p m～2：20 p m）（教師1名 児童2名の個別指導）

④ 指導の内容

- ア 身近な物の絵・写真カードを提示し、指示されたカードを取る。
- イ 動作のカード（歩いている、走っている、笑っている、など）を取る。

⑤ 年間計画

- 1学期……点結び、線なぞり、なかま集め、ひも通しなど
- 2・3学期……絵本の読み聞かせ、絵・写真カード選び、ひも通しなど

⑥ 単元指導計画

ア 単元名「なまえをたくさん覚えよう」

イ 単元設定の理由

C児は友達や先生など人に対する興味はあり、自分の気持ちを伝えようという気持ちがあるので、より正確に相手に伝えられるようにしていきたい。普段の生活では、言葉で指示すると同時に身振りで示しているが、絵・写真カードの使い方に慣れ、自分の動作や気持ちの整理を行ったり、自分の要求や気持ちを相手に伝えられるようになり、自分で考え、自分から行動できるようにしていきたい。

ウ 単元のねらい

- ・集中して取り組む。・教師の言葉を理解して、絵・写真カードを取れるようにする。

エ 指導内容

- ・身近な物の名前を知る。・絵・写真カードを選ぶ。・動作の絵カードを選ぶ。

オ 単元指導計画（15時間）

- ・学校にあるものや身近な物の写真を見て、指示されたものを取る。5時間(本時3/5)
- ・身近な物や動物などの絵カードを見て、指示されたものを取る。……………10時間
- ・動作の絵カードを取る。(〇〇が〇〇している。〇〇を〇〇している。)

⑦ 本時までの指導の経過

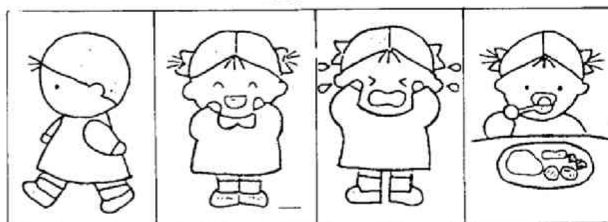
1学期は課題学習の時間はひも通し・点結びを中心に行った。ねらいは、目と手の協応動作、手指をコントロールする力を身に付ける、集中して取り組む力を付けることである。

2学期は、1学期に取り組んできた内容を週3～4回ある朝の課題学習の時間に行い、午後の課題学習では、言葉に関する指導を中心に行うことにした。(言葉に関する指導は1学期は学校生活全体の中で行い、特設の時間は設けなかった。)

(7) 授業案

- ① 本時のねらい……発問を理解し、指示されたカードを正確に取ることができるようにする。

「動作カード」



- ② 教材・教具…写真，絵本，紙芝居
③ 授業の展開

時間	区分	指導内容	学習活動	指導上の留意点
5分	導入	・絵本の読み聞かせをする。	・絵本の読み聞かせを聞く。	・物の名前をはっきり示す。
20分	展開	・写真カードを取る。 教室の中にある物 学校の中にある物 ・動作の絵カードを取る。 ○○が○○している。 ・ひも通しをする。	・5～6枚の中から写真カードを2人交互に取る。 ・3～4枚の絵カードの中から正しいカードを2人交互に取る。 ・ひも通しをする。 ・玉とストローを10個ずつ交互にさす。	・2人に見やすい位置にカードを置く。 ・よく分からない時は教師が動作を示範する。 ・まだ一人ではできないので、1つ1つ示す。
5分	まとめ	・紙芝居の読み聞かせをする。	・紙芝居の読み聞かせを聞く。	

(8) 指導経過

初めは学級や学校の中にある物を写真に撮り、提示した。教室の中にあるものは名前を知っており、写真を見るとすぐ実物を指差しするようになった。初めの頃は他児の番であっても直ぐに手を出していたが、他児と交互に取るというルールも分かってきて、答が分かっても待とうとするようになった。反面、食べ物、果物など身近な物の名前はよく知らないことが明らかになったが、その原因は、経験不足からとも思われる。主語、述語からなる簡単な動作の文はかなり理解（主語はいつも同じとする）しているので、今後は、主語を変えたり、「○○を○○している」という目的語と述語の文なども増やしていきたい。

(9) まとめと課題

本児は、友達にどう接していいか、どう表現していけばいいか、などが分からず乱暴な態度をとってしまったり、できないことがあると途中で投げ出してしまうこともまだ多い。考えたことや要求を整理しながら、表現を含めた行動全体を整理させることが今後とも大切であり、カード学習はそのために有効であると考え。また、カード以外の手段での意思の伝達に関して、どの様な形で自分の気持ちを相手に伝えていくか、どういう方法が一番相手に伝えやすいか、などを探っていく必要がある。

3 事例Ⅲ－心理的適応・対人関係の改善をめざした指導（③グループ）

(1) 本グループの指導における重要点

本グループは「対人関係がもちにくい」児童・生徒たちである。知的あるいは身体機能的障害に比べて対人関係における自己表現、自己表出、相手のサインの正しいキャッチができないため、好ましい対人関係が持てない。このため、次のことを特に配慮して指導することが大切であると考えます。

- ① 児童・生徒の学校生活、家庭生活、生育歴などを詳細に把握し、対人関係が持ちにくい場面、理由、時期等を的確につかむ。それを基に、特定の人とのかかわりを育て、定着させることを通して心理的に安定し、自分の気持ちを自分で表現できるようにさせることを当初の指導のねらいとする。
- ② 対人関係がスムーズにもてる場面や状況を検討し、教師との信頼関係、伝達の意欲の高まりを培う中で、長期的な展望をもって指導を進めていく。
- ③ 指導による児童・生徒の変化を具体的につかみ、励ますとともに、教師だけでなく、友達や周囲の人との対人関係も助けられるような指導を継続して行う。

以下、小学校心身障害学級（F学級）の指導事例である。

(2) E児の養護・訓練の個別指導計画

児童名	E児(男子)	年齢	8歳(小3)	障害名	精神薄弱(軽度)
児童の実態	身体健康……健康で病欠はほとんどない。尖足歩行。 心理的適応……集団でも個でも担任の視界内なら安定した生活が送れる。担任がいない状況が生じると泣き叫ぶなどしている。 運動・動作……動作の模倣は不完全で、手・指先の操作性が不十分である。 意思の伝達……言語や文字(ひらがな・カタカナ)を介しては可能だが、状況によっては使えない場面もある。				
指導目	長期目標……本児の周囲の人々と相互に意思を伝え合い、より豊かな生活ができるようになる。 短期目標……心理的安定を図りながら、担任からはなれて過ごすことができるようになる。クラス内の友達とのかかわりを円滑にする。				
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日のマラソン、山登り、歩行訓練等を通して、体力・気力を養う。 ・教科学習を通して、より広い外界とのかかわりを持つことや、疑似体験をする。 ・基本的生活習慣の定着を図るため、朝の会で毎日服の着方、洗顔、排便、ハンカチ・チリ紙の常備等を点検する。 ・係活動、そうじ、給食配膳、等一日の学校生活を自主的に取り組み、自信を持って生活する力を身に付ける。 				
指導方法・形態	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の先生・職員・他クラスの児童の協力を得て、伝言・おっかい・友達とのかかわりの場を設定していく。これらのことを通して生活の中に自信をもたせ心理的安定をはかっていく。担任とのかかわりだけから、いろいろな人との交流ができるように配慮していく。 ・教科学習において意思の伝達の場を設定し、改善を図っていく。 ※養護・訓練という時間は設定していないが、学校生活全般を通して個への配慮を常にしている。 				
評	<ul style="list-style-type: none"> ・担任以外の人とのかかわりがもてたか。 ・友達と楽しく言葉がかわせたか。 				

(3) 養護・訓練の位置付け（授業研究は「体育」の授業）

	月	火	水	木	金	土	
	全校朝会	朝の会	朝の会	朝の会	全校集会	朝の会	
1校時	体育 ①④ b	音楽 ②④⑤ b	歩 行 訓 練	学習 ⑤ b	体育 ①④ b	学 級 園	調 理 実 習
2校時	学習 ①④ a			体育 ①②⑤ b	学習 ②⑤ a		
3校時	生活 単 元	作 業		図 工	作 業		
4校時	②③ b	②③ b		①③ b	②③ b	③ b	③⑤ b
				給食 ① b			
そうじ				そうじ ④ b	そうじ		
5校時		生活単元 ② b					
6校時		クラブ ②⑤					

・授業の形態…… a：グループ b：全体
 ・養護・訓練の5つの柱
 ①：身体の健康 ②：心理的適応 ③：環境の認知
 ④：運動・動作 ⑤：意思の伝達

(4) 学習指導計画

① E児の実態（意思の伝達に関する内容）

常同行動があり、状況の変化に対して適応能力が弱く、パニック状態になることもある。大人・友達に関係なくスキンシップは苦手としている。大人との言語による意思の伝達は、かなり可能で正確なものである。しかし、友達からの話しかけに対しては、泣いてしまう程拒否の反応が見られたが、少しずつ改善されている。意図的に友達とのかかわりの場を設定して来たが、相手の顔を見ることはできない。本児の表情も暗くなりがちである。

② 指導の方針

このような本児の実態を踏まえ、体育の授業においては、本児が最も得意とする運動種目（野球やサッカー）や活動を全体で取り組むことにより、スキンシップの場面を多くしたり、友人とのかかわりの場を計画的に取り入れ、一緒に活動する、相手と息を合わせる、協力する、話し合う、などの活動を通して、友達関係の改善を図ることとする。

③ 年間指導計画

	一 学 期	二 学 期	三 学 期
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・マラソン（1曲） ・タイヤ引き・平均台 ・ろく木登りと渡り ・けんすい・おんぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・マラソン（2曲） ・タイヤ引き・おんぶ ・野球 	<ul style="list-style-type: none"> ・マラソン（3曲） ・〈マラソン大会〉 ・タイヤ引き・おんぶ ・サッカー

④ 本時の指導

ア 場所…体育館 イ 指導時間…木曜日第2校時

ウ 授業の形態等

「体育」 F学級一斉指導 児童数5名（男子3名，女子2名）指導者数2名

エ 本児のねらい

- ① 相手を意識して，話し合いや一緒に活動ができる。
- ② ゲームや遊びのルールを知る。

オ 展開

	学 習 活 動	教 師 の 働 き かけ	
		(本児へ)	(全体へ)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・班長が整列させて体育館へ移動。 用具準備（カラーコーン，タイヤ，テープ等を各自準備） 		<ul style="list-style-type: none"> ・担任は児童の後ろより移動する。 ・準備の確認をする。
展 開 30分	<p>体操・マラソン タイヤ引き ・おんぶで前進 相手きめ ・自分のやりたい相手を決める。 ・相手に了解を得る。 二人組でキャッチボール ・キャッチボール 野球の練習 ・バッター ①打って塁へ出る。 ②友達が打ったら次の塁へ走る。 自己評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友人を乗せてタイヤを引くよう言葉をかける。 ・相手の顔を見て話しかけるように言葉をかける。 ・他児の動作等を意識するように言葉をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピードの確認 ・声かけ ・安全確認 ・相談して相手を決めるようにさせる。 ・正しいボールの投げ方，受け取り方を伝える。 正面でとれないボールを投げる。 ・ボールが打てたか何点入ったか等の質問をする。
まとめ 10分	<p>整理体操 後片付け ・班長と共に教室へ戻り洗顔・着替え</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・服の着脱 ・後始末 ・点検
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・キャッチボールの相手を決める相談に参加し，自分の気持ちが伝えられたか。 ・ルールが理解できたか。 		

(4) まとめと今後の課題

入学当初は，担任以外とのかかわりを一切拒否し，担任が見えなくなるとパニック状態になることが多く，教室等から離れることができなかった。日常生活の指導においては，係の仕事として，担任の指示にしたがって，他の教室等におつかいに行くことができるようになるなど，大人に対しての関係は改善されつつある。体育等の学習における他児との関係は，教師がいる場面では，徐々に言葉をかけあう段階まで改善されつつある。

このような本児の対人関係の問題は，心理的，身体的に距離を置いた母親の養育態度が原因の一つと考えられた。しかし，入学以来の本児の成長にともなって，母親はその成果

等を客観的に認められるようになってきて、指導の積み重ねの大切さを実感し愛情を傾けるようになってきた。以上のような指導の経過を通して、E児に対する指導の今後の課題を次のように考える。

- ① 本児の対人関係の問題が早急に改善されることは難しいが、担任から離れて他の大人への働きかけはかなり広まっているので、これをさらに継続し多くの人達とのかかわりを拡げる指導を進めていく。
- ② 友達とのかかわりは大人（主に担任）を介してのみ安定している。本児に対する他児からの働きかけは、大人目から見ても「からかい相手」として映ることが多く、本児にとって避けたい関係と言える。今後は、他児にE児の思いを担任が代弁することにより、E児自身が好ましいと考える「他児からの働きかけ」が可能となるように指導したい。

また「体育」の授業における「野球」に本児は興味・関心を強く持っており、家庭での父親とのキャッチボールを通して野球が上手になりたいという意欲もある。（これは、「一塁に行きたいな」という言葉、「アウト」「試合終了」という野球用語を使うときの表情からも十分伺い知ることができる。）野球が得意なE児というイメージが育っていけば、他児の本児に対する見方も変わってくると思われるので、本児の得意とすることがさらに伸ばせるよう指導していく。

- ③ 障害の有無、発達段階の違いにかかわらず、親子の絆の強さは子供の心を安定させる。両親、特に母親との関係は、E児の成長にとってマイナスに作用していると思われる。しかし、母親の育て方や対応を早急に換えさせようとするのが、今プラス作用に働くとはとても考えられない。心身障害児を育てる親の苦しさ辛さを共有しながら、担任が親子共に成長してほしいと願う気持ちで、精神的に支えていくことは重要であろう。

IV 研究のまとめと今後の課題

本研究では、各研究員の事例の様々な課題から、養護・訓練の「意思の伝達」に絞り、その指導の在り方について研究した。研究を進める上では、昨年度のまとめを受け、一人一人の課題への対応に主眼をおいた指導のあり方を追求するため、同じような課題によって、三つのグループに分けて、「意思の伝達」の指導における基本的な考え方を検討した。

この考え方を全体で報告・整理し、①実態把握、②指導計画、③指導内容、④指導方法について、共通理解を図った。特に、どのケースにおいても一人一人を尊重した指導をするには適切な実態把握が重要と考え、時間をかけて検討した。この中では、生育・教育歴や発達

診断等の基礎データとともに、伝達の相手・内容・方法等の具体的なデータと表現された行動や言葉の意味・内容についての分析の重要性が共通理解された。

児童・生徒は、どのように障害が重複し、どんなに重度であろうとも、自己の意思をサイン・身振り・音声・言葉・パニック等の方法を用いて表現しているという見方を基本とし、指導者として大切なことを以下の4点にまとめた。

- ① その表現を受容する態度・心構えを持つこと。
- ② 児童・生徒との信頼関係（共感関係）をつくり、よりよい意思の相互伝達を図る場を設けること。
- ③ 共感関係の輪を広げることをめざし、対人関係の基礎となる心理的安定や伝達の方法や能力を高めることを目標とすること。
- ④ 障害の状況や発達段階に合わせた表現力を引き出す指導を工夫すること。

適切な実態把握に基づく、指導計画の作成と指導については、3グループのそれぞれのまとめから総合的に考察すると、次の2点が明らかになった。

- ① 「意思の伝達」はこれ一つだけの領域で独立して指導することは不可能で、健康面・機能面等の身体の状態や、心理的な適応状況、環境の認知がどの程度なされているか等多面的に捉えながら進めていく必要がある。
- ② 特設の養護・訓練の時間における指導のみでなく、学校教育全体の中で系統的・計画的に指導が行われることで、より効果を上げることができる。

また、児童・生徒のわずかな変化でも実態の変容として捉え、その都度部分的な細かい評価を行い、次の目標・指導に結びつける。この実態把握～指導～評価のフィードバックを繰り返し行い、一人一人に対応した的確な指導にしていくことが重要である。今後の課題としては最終的な評価についてさらに検討し、よりよい在り方を探っていきたい。

この研究を通し、私たちは様々な課題を抱える児童・生徒一人一人が、より豊かに生きるための基礎的な技術・能力を培うことを目的とするのが養護・訓練であると捉えた。研究を進めるほどに、障害の重度・重複化、多様化の傾向にある児童・生徒の意思の相互伝達の重要性と指導の奥の深さに気づき、短期間でまとめの難しさを感じた。また一方、具体的指導場面においては、一人一人の個性も課題も千差万別であり、学習グループを編成することの難しさがある。しかし、個別・集団双方の指導の場を設ける必要があり、教育活動全体で構造的・系統的にいかに関与していき、指導していくことなど、「養護・訓練」の教育課程上の位置付け、指導内容・方法をさらに検討する必要があることを再認識した。